ヴェルガの牙

ラグナウルフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヴェルガの牙

【Ｎコード】
Ｎ９２７４Ｍ

【作者名】
ラグナウルフ

【あらすじ】
争いの耐えぬ世界、フィレディルカ。
義を重んじて貧しい人を救おうとする一国、ファーメル。
帝国として多くの軍事力を持ち、最大兵力を保持したヴェルガ帝国。
海や湖が多く、農作物などの自然物の多いイールド。
呪術などの面妖な術を使用する国、マフェリア。
そしてその四国の中心で世界の皇帝と名乗る小国、アスガルド。
そんな世界にやって来てしまった少年、光一は世界で何を見て何を感じ、何をするのだろうか？

ＡＣＴ．０００　奇抜な世界、フィレディルカ（前書き）

この小説は戦争の悲惨さなどを描いた物です。
そういった描写などが苦手な方はお気をつけください。
そこまでアレな表現もないとは思いますが……。

ACT．０００　奇抜な世界、フィレディルカ

いつもは美しい草原。そこは死で埋め尽くされていた。
鉄の鎧を着込んだ兵士同士が、己の武器を中心にぶつかり合う。
剣と剣が両軍の兵士の間で交差し、押し勝った方の刃が押し負けた方の体を切り裂く。
まるで人間が作ったとは思えないほどの景色がそこには広がっていた。しかし、そんな景色もこの世界ではいつもの事だ。
剣と剣が打ち合い、槍と槍が横行し、矢と矢が空中で交差し、馬がその死体を踏み抜いていく。

―戦争―

そう。これは血を地で洗い流す”戦争”と呼ばれる物。
やられた兵士の体からは血が流れ続け、勝った兵士はさらなる血を求めて戦い続ける。
最初は死にたくないから戦っていた兵士も、今では血を求めるためだけに戦い続ける――いわばバーサーカーのような――狂戦士となってしまっていた。それが戦場の臭いであり、戦争なのだと思いしらされる。
だが、そんな世界で場違いなほどに美しい少女が居た。
赤い甲冑を身にまとい、その色と同じように……いや、むしろその色とは全く似ていないほどに美しい赤髪をした少女。
彼女は今、瞳を閉じて何かを感じ取っているかのようにも見える。
彼女は何を考えているのだろうか。隣に居る兵士はそう考える。
彼女はこの戦場で一体何をするのだろうか。さらにその隣にいる兵士は考える。
やがて少女はその双眸を見開いた。髪と同じように透き通るような赤い色をした瞳は戦場を見つめている。

戦友(とも)が敵の兵士を殺し、敵の兵士が仲間を殺す。そんな光景を目に焼き付ける。
すぅ……と小さく息を吸い、体の底から声を張り上げながら彼女は走り出した。
「私の名はシエナ＝ファーメル！！　ファーメルの第一姫なり！！
私に敵うと思うものは……」
走る。周りの兵士もシエナに負けじと走るが、少女の速度には追いつけない。少しずつ兵士達とシエナの距離は開いていくが、シエナはそんな事お構いなしで走り、腰につけた細く白い剣を抜き放って右手に構えた。突進の構えを見せていると何人かの兵士が敵味方問わずに気が付いていた。
「戦姫はこの俺が討ち取る！」
そのシエナの突進の道をふさぐように一人の妙に黒っぽい鎧を着た男が現れる。
走っている最中に級に目の前に現れたのだ。彼女が速度を緩めなければ大変な事になると男は考えていた。
だが、シエナは速度を緩めることなく、逆にさらに速度を上げて男に肉薄し、小さく笑った。
「フッ……」
「はぁっ！！」
兵士の剣がシエナを両断しようと真っ直ぐに落ちてくる。そのままいけば斬られる。
黒っぽい鎧を着た兵士は自らの勝利を確信して口元をニヤつかせた。しかし、少女の笑みも消えることはなかった。
いや、むしろ笑みが消えたのは男の方だった。
シエナは男の剣を避けた。避けられるはずのない速度だと誰もが思う速度で、落ちる木の葉に刃を向けたみたいにスルリと避けたのだ。
そしてシエナの剣は真っ直ぐ男の首を貫く。
「その程度の剣技では私を切ることはできない。残念だけど、君の

人生はここで終わりだ」
突き刺した剣を抜くと同時に兵士の首から大量の血があふれ、そのままバタリと倒れこんだ。
首を貫いただけ。息も出来ず、苦しそうに痙攣する男を悲しそうな瞳で見下げるシエナ。
その光景を見た味方の兵士が騒ぎ出す。
「うぉおおお！！　戦姫様が着てくれたぞ！！　これで我々は勝てる！！」
「さぁ来い！　ヴェルガの兵士共！！　戦姫のいるわれらファーメルに勝てると思うなよ！」
膠着し始めていた戦場は動き出す。
シエナの登場によりファーメル軍の士気は上がり、ヴェルガ軍を押し始めた。
「行け！！　私たちの平穏を取り戻すために……我等の領土を侵すヴェルガの兵士共を生かして帰すな！！！」
「うおおおおおおおおおぉぉぉぉ！！」
シエナの登場により、この争いはファーメルが勝利を収める形で終結したのだった。

「ふふ……やはり戦姫の名は伊達じゃないって言うことね」
ヴェルガ領の中心に位置する都、その都のさらに中心に位置する城に一人の少女が座っている。
座っている場所は王の謁見の間と呼ばれる部屋。その椅子に座っている少女こそヴェルガの王であるレイラ＝シンフィアだ。
「キヒヒ。次はどうされますかー？　レイラ様」
そんなレイラの隣で一人の男が嗤っていた。
その男はまるで骨と皮しかないように体中から骨格が浮き出ており、長身のためかまるでヒョロっとした感じを受ける。さらに少々体がフラフラとしているためかなにやら危ない雰囲気を受けてしま

う。いや、危ない雰囲気を受けるのは何もその行動だけではない。その男は目を黒い布で覆い、目隠ししているのだ。それなのにまるで全てが見えているかのように少女、レイラのほうを見ていた。

だが、危険な雰囲気と言えばレイラもそうなのかもしれない。見た目は１２歳くらいの少女なのだが、その表情はどことなく大人びて見える。

まるで男を誘う淫魔のように妖艶な笑みをしており、男とは別の意味で危険な雰囲気を醸し出していた。

「まだよ。先の戦いはただ彼女達の力を見たかっただけ……。今のままではまだまだあたし達に勝つことは出来ないわ。むしろすぐに勝負はついてしまうでしょうね」

「ほほぅー。全ての国を併合し、新たな国を作ろうとしているあなたがなぜそんなに争いにこだわるのかな？」

「そうね……単なる……」

レイラは目を閉じて言葉を紡いだ。

「単なる……暇つぶしかしら？」

ACT．001　ファーメルの少女達と女性

夜、とある館の一室で可愛らしい声が響いていた。
まるで子供のように高い声のせいで誤解を受けそうだが、怒気を含むその声は怒っている事が分かる。
「姉さんは不用意に前に出すぎなんです！！　もしも怪我をしたらどうするんですか！？」
「うぅ……すまない……」
怒られているのは先の戦争で一番の功労者、シエナ＝ファーメルであった。
短くて赤い髪は動きやすさを重視したものではあるが、その短さが逆に美しく感じるものは多い。特に兵士達にそう感じる者は多かった。
ちなみに、怒っているのはそのシエナの妹であるファーナ＝ファーメルである。
胸が大きく、身長も十分あり、とても美しいシエナとは対照的な体系が特徴的。
一つしか年が違わないはずなのにファーナはまるで三つも四つも違うかのように見た目は小さく、胸も平らだった。鎧の下からでも大きさの分かる姉、シエナとは大違いなその大きさに嘆き悲しむ人も多い。
ただ、シエナとファーナでどっちの胸が好みかで兵士に派閥が出来ているのだが、シエナはそのことを知らないしファーナは一応知っている。
「姉さんは自分の立場を分かっておいでなのですか？　現在ファーメルに王は居ません……数ヶ月にお父様がなくなり、男児の居ないわが一族は跡継ぎが居ないのです。そんな中であなたを失ったら確実に私達の国であるファーメルは落とされてしまうんですよ？」
「わ、分かってる。ただちょっと我慢できなくて……」

「戦狂ですかあなたは！！」
「まぁ、良いではないですか。ファーナ殿もその辺にしてあげると良い。シエナ殿も反省しているようだぞ？」
急に後ろから声をかけられてファーナはびっくりして飛び上がった。
シエナは反対側に居たので気づいていたのだろう、クスクスと小さく笑っていた。ファーナはシエナをキッと睨んだ。幼さの残るその睨みはシエナには子供が駄々こねているようにしか感じられなかった。
「うぅ……姉さん、メリニアさんが来たなら教えてくれればよかったのに……」
「いやいや、すまんなぁ……もうかれこれ一時間も怒られているのだからそろそろ許してやって欲しいと思って」
「ありがとうございます、メリニアさん」
「これじゃあ私が悪者みたいじゃないですか……」
ファーナはため息をついて後ろを振り返った。
メリニアと呼ばれる女性はファーメルに昔から仕える一族の末裔で、現在のセークリッド軍隊長である。
特徴的なのはこのフィレディルカでも珍しい長い黒髪で、腰まで届くほどの髪は光を受けて輝いている。
さらに一番の特徴といえばその胸である。とにかくデカイ。
敵兵士すら目がいってしまうほどに大きい胸、さらに彼女の戦闘服は露出の激しい物で、狙っているとしかファーナは思えない。
姉にもメリニアにも体系でも形勢でも負けているファーナは少々落ち込み始めていた。
別に彼女は間違った事をいっているわけではないのだが、シエナとメリニアには勝てないということだろう。渋々ながらも説教をやめにしていた。
「もう……これからは勝手に一人で突っ込むなんて事はやめてくださいね？」

「はい」
「返事だけはいいんだから……。それよりも、メリニアさんはどうしたんですか？　急に私たちのところに来るなんて……なにか用事でも？」
「おっと、そうだった」
メリニアは彼女達の近くに腰を下ろした。
二人の姉妹は同時に顔を合わせ、自らの横に座ったメリニアを見て……ファーナが急に声を上げた。
「って、その腕に下がってる瓢箪ってもしかして……！！」
「んん？　これか？　これは……」
グビッと口をつけて中の液体を呷る。中身はもちろんお酒なのだろう、とても幸せそうにメリニアは瓢箪の中の物を飲んでいた。
しかし、その瓢箪は軍の食料倉庫内へとしまわれていたもののはずで、そういったものの管理の報告を受けているファーナは一発で分かった。そのため、無断で飲んでいるメリニアを先ほどのようなにらみで見つめていた。
シエナはいつものことと別に気にした風もないが。
「やっぱり先月と今月のお酒の数が合わないと思ったら、メリニアさんが飲んでいたんですね！？」
「ゴク……ゴク……ゴク……ぷはぁ。うん？？　別にいつものことだから気にしなくてもいいんじゃないか？」
「軍の食料庫は大切なものなんですよ！？　もしも城に立てこもる必要が出て来た時などに兵糧がなかったら兵士達の士気はガタ落ちします」
とはいえ、メリニアにもそんなことは分かっているはずだ。酒好きでも彼女はファーメルの軍を統べる将軍の一人なのだから。
だが、酒好きの彼女がそういわれて「はい分かりました。もうしません」なんて言うはずもない。
「もぅ……これからは出来るだけ報告してからにしてください。それに量も調節しないと体を壊しますよ」

なんだかんだで優しいファーナであった。
「それよりも用事の話を聞かせてください。気になります」
「ね、姉さん……」
「まぁ、ファーナも良く聞いているといい。ちょっと大切な話になるかもしれん」
と、急にまじめな顔をして言うメリニアを見て2人も緊張した面持ちを見せる。
いつも温厚な彼女がマジメな顔をする事なんて多くはない。それほどの事があるかもしれないのだ。
「実は私の兵士達からもちょくちょく報告があったのだが、ここから西方にあるウェンズデイ草原……最近あそこで不可解な出来事が頻繁に起きているらしんだ」
「ウェンズデイ草原に……ですか？」
「うむ。どうやら最近夜になると星が強く瞬くそうだ。どういうことか私には分からないが、知り合いの占い師も似たような事を言っていた」
「なんだか……よくない兆候ですね」
星が瞬くのはよくないことの前兆であるという話がファーメルには流れている。
その迷信を信じているのではなく、ファーナが気にしているのはその事による人心の乱れが気になっているのだ。
良くない事が起こるかもしれないと人々が慌てれば何かしらに必ず悪影響は現れる。”絶対に”である。
「だから軍師であるファーナ殿はどのようにしてこの事態を回避する？」
「ぐ、軍師って……。確かに私は軍の指揮もしますし、政もやってますけど、軍師と呼べるほどにはなってませんよ」
「いいから、いいから。ファーナ殿、そのような事態に陥ってますが、どうされますか？」
「そうですね……姉さんの部隊がウェンズデイ草原に赴いて一度調

べてきてもらったほうがいいかもしれません」
「……めんどくさそう……」
渋い顔をしながら言うシエナに呆れ顔でファーナは言った。
「国の姫である姉さんが何を言うんですか。それに姉さんが行く事で不吉な事なんて何もないって宣伝するんですよ」
「でも……」
「分かりましたか？」
「はい」
ファーナに一瞬鬼が宿ったように見えたが、それはシエナの見間違いだろう。
シエナはめんどくさそうな表情を改めることなくその場を立ち上がり、そして扉のほうまで歩いていく。
「あぁ、姉さん」
「ん？　まだなにかあるの？」
振り返ったシエナにファーナは少々心配そうな顔を向けて
「気をつけてくださいね」
そうシエナに言った。
「もちろん」
シエナは笑みを浮かべながらそう答えると軍部に兵士を集めるように通達したのだった。

ACT．001　ファーメルの少女達と女性（後書き）

シエナは主人公じゃなくてヒロインです。あしからず。

ACT．002　異世界からの来訪者

空はすでに暗くなっており、明かりは星の光だけという心もとない状況となっていた。
そんな中をシエナ率いる部隊、約２５名はウェンズデイ草原へとやってきた。ちなみに、なぜこんなに少ない人数なのかというと、単純に夜目の利く人間が少ないだけの話だ。
ファーメルの軍隊の約半分は農民や百姓などの民からやって来ている。それもほぼ自主的にだ。
それだけ今の世に不満を持ち、世界を変えたいと願う人が多いということだが、逆にそれだけ世界が不安定でもあるとも言える。
中央に権力を集める中央政権が廃れ、今の中央は名ばかりの皇帝、名ばかりの権力しか保持していない。
その為、四国は中央のアスガルドをほぼ無視して行動をしていた。
――それぞれの野望のために――。
先日戦ったヴェルガは世界を統一し、絶対なる王となるためにその他三国に戦争を仕掛けている。その圧倒的な軍事力を持ってすれば三国を潰す事などたやすいようにも感じるが、何故か王であるレイラはそれをしない。不気味な国だとシエナは感じていた。
僻地であるイールドは増えてきた人口を養う為に行動を起こし始めている。近くの国と戦争して勝利し、その領土を貰って増えてきた人々を養うのだ。
呪術や魔術などを得意とする宗教的な国、マフェリアはその宗教を広めるために多くの国とイザコザを起こしている。
そしてシエナのファーメルは世界を平和にするため、争いのない世界にするため、世界を統一しようとしている。
その四国の考えや想いはぶつかり合い、時に戦争となり、時に和睦し、また時に戦争するのだ。
そんな状態が続いてもう２０年になる。さすがに民は疲れを見せ

始めていた。
「どうにかしなければ……」
ファーナがとった行動は自らが政治を行い、民の不満を出来るだけ解消するということであった。
だが、姉であるシエナは剣を取り、自ら戦争に出るという行為をとった。
姉妹でありながら正反対の行動を起こしたわけだが、無論どちらも父親に反対された。しかし、その前王である父親は数ヶ月前に病で他界してしまっている。
それからの二人の行動は早かった。
反対されていた行動を一気に起こし、ファーナは継承者争いで疲弊し始めていたファーメルを立て直したのだ。
対して、シエナはこれ幸いとばかりに国を襲ってくる他国と戦争を行って勝利を収め続けた。
二人が居なければ今のファーメルは存在しなかったといっても過言ではないだろう。それほどに二人の能力は正反対ながらも高かった。
「戦姫様。この辺が噂の場所のようですが……」
「分かった。皆分かれて異常がないか確認しろ。敵の間諜を見つけた場合はすぐに捕まえろ」
「はっ！！」
そう言って25名は全員バラバラの方向へと駆け出してゆく。
「ふぅ」
それを見届けてからシエナは小さくため息を放って空を見上げた。
メリニアが言っていたように確かに星の輝きが強いような気がするが、シエナには大きな違いなど分からなかった。
いつも通りの夜空――そうとしか思えない。
シエナは近くにある大きめの大木に背を預けて座り込んだ。
ウェンズデイ草原というだけあって木よりも原っぱの方が多いため、その木々を抜けるさわやかな風が彼女の髪をサラサラとなでる。

「戦姫……かぁ」
いつの間にか呼ばれるようになったその称号。
呼ばれるようになったのはここ一ヶ月の間だが、その称号は他国にまで広がっているらしい。
この称号をつけられた理由は簡単だ。シエナの実力は一般兵を軽く上回り、過去に数百の軍勢に囲まれても生還した所による。
あの時からシエナは戦姫と呼ばれるようになった。正直、ファーメルの第一姫と呼ばれるよりはましなのだが、”戦姫”と言うのも気に入っているわけではない。
そもそもシエナは自分のことを女の子らしいと思ったことは一度もないのだが、それでも自らが”女”であるという意識はあるはある。戦などと言うものに未を染めるよりも、普通の平和な日々で結婚し、平和な時を生きていきたい。そんな少女みたいな気持ちを自嘲しながらも捨てきれないでいた。
（こんなに簡単に人を殺せる私が少女のような夢を抱くなど……間違っているのだろうな）
奪った何百、何千という命が彼女に重くのしかかる。
それが、戦争というものなのではないだろうか。
彼女が殺してきた命。彼女を守って死んでいった者の命。そういった命を背負って人は生きていかなくてはならないのだろう。
だが、人一人の命はあまりにも重過ぎる。
その人間の生きていったであろう数十年を一人の少女に任せているようなものなのだから。
その人間がしてきたであろうことを一人の少女に任せているようなものなのだから。
その少女が重みに耐えられないとしてもその命は確実に少女の背中に乗っかかってくる。
だからこそ戦争は――つらい――
「あぁ……出来れば戦争のない世界に生まれたかった……」
いつもならば絶対にもらしてはいけないつぶやき、それは弱音。

彼女は戦姫と呼ばれる皆の士気を上げる戦士なのだ。そんな彼女が弱音を吐けば士気は逆に下がってしまう。
そんなことはシエナだって分かっている。
だが、シエナは戦姫である前に一人の少女なのだ。
少女に常に気を強く持てというのも酷な話なのではないだろうか。
それに今は誰もいない……一人なのだから……。そんな時にくらい弱音を吐いたっていいのではないだろうか。
「戦姫様」
「……ッ！！　どうした？」
気がつけばシエナの前には送り出した２５名がすでに集まっていた。
あれから1時間ほど時間がたっていたようでウェンズデイ草原を調べ終わったらしい。
（私の弱音は……聞かれていないな。よかった）
「で、何か変わったことはあったか？」
「いえ何もなかったです。少々星の輝きが強いと感じるくらいしか……」
「そう」
落胆などはしていない。しかし、何もなかったのなら何もなかったでかまわない。
シエナは立ち上がり、空を見上げた。
月のない新月の空はいつもの新月よりも明るく感じた。それはまるで日の光のようで、視界を白くさせてゆく。
「……ッ！？」
「戦姫様！？」
「な、なんだ！？」
そしてようやく異常に気がついた。
視界が急にまるで靄にかかったかのように真っ白になったのだ。
それは光のようで、それでいて目に刺激を与えぬやわらかい光だった。

他の兵たちの叫びからすると皆同じ状態のようである。
シエナはこういう時にどうすれば良いかを冷静に考えた。
（他国からのなんらかの攻撃……？　いや、ウェンズデイ草原は首都から近い。ここまで接近されるなら何処かから報告が来るはず。なら、私を暗殺しに来た暗殺者の行動なのだろうか？　分からない。とにかく今は落ち着いて……）
考えているうちにゆっくりと靄は引いてゆく。
先ほどと変わらないはずの光景がなぜか変わってしまったかのように感じる。そんなはずはないのに。
「戦姫様。ご無事ですか？」
同じように視界が回復した兵士達にそう声をかけられる。
「大丈夫だ。それよりも、周囲に何か変わった様子はないか？」
「えぇっと……ん？　戦姫様！！　向こうで誰か倒れているようです！」
「何！？」
一人の兵士が指差したほうを向くと確かに誰かが倒れているのが見えた。先ほどは誰もいなかった場所だ。
「あ、戦姫様ッ！！？」
シエナは兵士達の制止を振り切ってその倒れている人物へと駆け出した。
抱き起こし、傷や何かがないかを確認する。
（……！！　酷い怪我だ……まるで何か大きく硬いものに体を思いっきりぶつけられたかのような……）
「戦姫様、どうですか？」
「これはかなり酷いな……。早く首都の方に戻って傷の手当をしないと」
「待ってください。その者の傷の具合を見ると首都までは持たないかもしれません。近くに村があったはずです。そこの医者に任せましょう」
「……そうだな」

シエナはその倒れていた人――まだ２０にも満たない見た目の少年を背負い、一番近くにある村へと歩き出した。
走ると傷に響くかもしれないと思った彼女の優しさだ。
「では私はファーナ様に報告してきます」
「よろしく頼む」
その少年を背負いながらシエナは胸がざわつくのを感じていた。
（この少年を見ていると何故か……なぜだかは分からないのだが……）
自らのざわつきを感じていながらもどうすることも出来ない苛立ちからか舌打ちをもらす。
それでも少年をおろすことなく村へと進んでいく。
（何故だか……この少年は絶対に助けなければいけないような気がする……）
強く瞬いていた星は、いつも通りの明るさへと元に戻っていた。

ACT．003　少年とシエナ

「骨折の部分がかなり多かったです。他には頭のほうに少し傷が出来ていました。こちらはどうやら吹っ飛ばされた後に切った物のようです」

村に着き医者に少年を見せるとすぐに手術すると言われてから2時間ほど。

少年の手術は無事終了し、後遺症もなく完了したとのことだ。ただ、何故このような傷を負っているのかは分からないようだ。

「まるで巨大な何かに吹飛ばされたかのような傷でした」

「そうか……やっぱり何者かに襲われたのか」

「それと少年が着ていた服ですが、どうやら我々の着ているものとは少しタイプが違うようです」

シエナはあの少年が着ていた服を思い出す。

上下真っ黒に作られており、ボタンとなる部分には黄色いボタンが四つほど付いていた。襟はホックのような物でとめられており、襟に『書記』と書かれた何かしらバッジのようなものをつけていた。

たしかにこの辺の人たちがあまり好まないような服装だ。

「一番のポイントはその生地ですが、これがどうやら我々の使う物とは異なっているようです。かなり光沢を放つもののようでして……」

「とりあえず、その少年に合わせてもらえないか？」

医者は首を横に振った。

「まだ意識が回復していません。もう少し様子を見てからにしましょう」

「……分かった」

シエナは椅子に深く腰掛けると瞳を閉じた。

そこまで眠たいわけでもなかったが、休息は出来るときにしなければならない。瞳を閉じてからゆっくりと眠りに付いた。

☆☆☆☆☆

見渡す限りが闇。
だが、そこから一歩も進めない状況に少年は焦る。
一歩を踏み出そうとしても足は動かない。腕を伸ばそうにも腕が動くことはない。
ただ見て、感じて、聞いて、それだけの感覚しか残されては居ない。
「……ッ！！」
しゃべることも出来なかった。ただ、息を呑むような掠れた音しか喉から発せられることは無い様ようだ。
少年の体を襲う感情は恐怖、絶望、その他の負の感情ばかり。
何が起こっているのかわからないからこそそんな負の感情ばかりが彼の体を襲う。
不意に、向こう側から光がやってきた。
闇を照らすような光、されどその光はとんでもない速さで少年のほうまでやってくる。
「……！？」
闇を照らす光は少年の望んだものの一つ。だが、何故だか少年は逆に不安を抱いた。

――あの光は何なのだろうか？――と。

人間よりも早く、馬よりも早く、そんなもの比べ物にならないほど早くその光はやってくる。
それと同時にガアアアという音が響いていた。音も近づいてくる。光と同時に。
何がなんだか分からない。少年に分かるはずもない。
やがてそれは見える。

「――――！！！！！！」
鉄の塊。そう称するのが一番しっくり来るかもしれない。
それが少年の体を襲い、吹き飛ばす。
少年はまるで蹴られたサッカーボールのように跳ね、そして三回ほど地面をバウンドした後に地面を滑ってゆく。
それと同時にパッパーと遅すぎる警告の音。
鉄の塊……車が、少年の体を吹飛ばし、とまることなくそのまま何処かへと走り去ってしまった。
（イタイ……痛い！！　痛い！！　痛いいいいい！！！！）
今まで経験したことの無いような痛み。
体中がギシギシと痛み、叫びだしたい衝動に駆られるも喉から声は出てこない。それどころか
「ごぶぅっ！！」
逆に口から溢れ出るのは血のみだった。
この瞬間に少年は自分の進む道がわかってしまった。どうすることも出来ないこの状況。
（俺は……死ぬのか）
視界は霞んでゆく。もともと真っ暗だった世界が本当に闇に閉ざされようとしていた。
少年が思い出すのは友達の顔、今までの楽しかった日々、死んでしまった両親、そして最愛であった姉。
（お姉ちゃん……ごめん……俺は先にお父さんやお母さんのところへ……）
おとづれるのはまるで睡魔のような感覚。気を張らなければすぐに意識を手放してしまいそうな感覚だ。
だが、少年はその感覚に抗えずに、意識を手放した。

☆☆☆☆☆

「ん……」

少年が呻いた時、シエナは心の底から安堵した。
（……何故私はこいつが生きていてよかったと思っているんだ……？）
自らの感情の正体が分からず首をひねるシエナ。しかし、そんな疑問は吹っ飛んでしまった。
少年の瞳が開かれようとしていたのだ。
ゆっくり。ゆっくり。それで居て確実に少年は目を覚まそうとしていた。
シエナは少年の顔を見るように身を乗り出し、少年の顔を見据えた。
少年は珍しい黒髪の持ち主で、服は上下共に真っ黒な物。身長は少々低いが、特に気にならないレベル。顔は悪くは無かった。
いや、逆に眠っている姿は少女のように無垢で、まるで穢れを知らなそうなほどに可愛かった。
「……んぅ……」
少年の目が開き、そして、シエナの顔を捉えた。
まだ合っていない焦点はゆっくりと合っていき、シエナの顔が確実に見えたであろう瞬間、少年が小さくつぶやくのをシエナは聞いた。
「おねえ……ちゃん……？」
「え……？」
その一言にはさすがのシエナも動揺せざるを得ない。
少年はその呟きを漏らした後にまたゆっくりと瞳を閉じて眠りに付いてしまった。
今までのことが無かったかのような静寂がおとづれる。
「どうですか？」
「ひゃうっ！！」
「……ひゃう……？」
唐突に後ろから声をかけられてびっくりしてしまうシエナ。あまりにも自分とは似ていないセリフに顔を真っ赤にしてしまった。

後ろに立っていたのはあの医者のようで、ちょっと笑いながらシエナを見ていた。
「はは。あなたもそうやってビックリするんですね」
「な、なんでもないです！！　それよりも、先ほどこの少年は一度目を覚ましましたよ」
「本当ですか。彼は何か言ってましたか？　怪我のこととか、何か他の事を……」
「……何も」
「そうですか……」
シエナは嘘をついていた。
少年は「おねえちゃん」とつぶやいたようだが、それを言うのは恥ずかしくてためらったのだ。
（な、なぜ私がこんなに恥ずかしい思いをしなければならないんだ）
次に少年が目を覚ましたのは、それから約１時間ほど後のことだった。

ACT．004　ファーナの不安と世界最強の戦士

ファーナの所にその報告が来たのは少年が目を覚ます少し前くらいの事だ。
姉であるシエナの部隊の一人である兵士から聞かされた話は彼女を不安にさせるものだった。
「光がやんだ後に少年が一人倒れていたんですか」
「はい。あの光と関連付けるのがやはり普通かと思われます。現在は戦姫様がかの者を付近の村まで運んで治療中かと思われます」
「わかりました。報告ご苦労様です」
「ハッ！！」
恭しく頭をたれて部屋から出てゆく兵士を見届けてからファーナはため息をついた。
それは不安から来るため息であった。
（姉さんがそう簡単に罠に引っかかるとも思えないけど、それでも何故だか不安になってしまう）
両親の居ないたった二人だけの姉妹である彼女達はそれぞれが相手のことを思いやっている。
シエナは不器用なのでそうは見えないが、ファーナはちゃんと姉の気持ちをわかっていた。
だからこそ不安に思う。
もしもその少年が他国の暗殺者だとしたら姉は危ないのではないか？そういった不安にファーナは駆られてしまっているのだ。
「大丈夫だ。シエナ殿がそう簡単にやられるはずが無い」
「メリニアさん……そう、ですよね……」
メリニアに励まされてもファーナの気持ちが落ち着くということは無い。むしろ不安は助長された気がした。
なんだか良くない事が起こるかもしれない。
そういう漠然とした不安が彼女を襲い、それでいて何も出来ない

自分にファーナは焦ってもいた。
何故自分も付いていくということをしなかったのだろうか。
何故姉一人に押し付ける形にしてしまったのだろうか。
不安はやがて自己嫌悪に変わり、自分を自分で傷つけ始めた。
「気にするな。ファーナ殿が悪いわけじゃない。ただ、この世界も……いや、人間が居る限りどの世界でも理不尽な現象は起こる。『あそこであぁしておけばよかった』は結果論であり、行動を起こす前に結果を知ることは出来ない。だからこそ仕方が無い出来事だと諦めればいいんじゃないか？」
「でも……」
「もうどうしようもないさ。今はまだ無事なんだし、シエナ殿が帰って来た時にその少年が居るようならば自ら行動を起こせばいい」
「そう……ですね。そうします」
ファーナの不安は消えない。しかし、今のままうじうじしても仕方が無いと決めたようだ。
ゆらりと揺れる蝋燭の火が二人の影をゆらゆらと揺らした。
ファーナはその蝋燭の火をじっと見つめ、そして自らの行うべき事を考える。
（私がやるべきことは……）
コンコン
考えようとして考えを妨げる音が響く。どうやら何かしらの報告が入ったようだ。
「どうぞ」
「失礼いたします」
焦った様子が無い所を見るとそこまで急を要する内容でもないようだ。
ため息を一つ吐き、ファーナは兵士の報告に耳を傾けた。しかし、そのあまりの無いようにファーナは息を呑んだ。
それは中央のアスガルド関連の報告であった。
アスガルドに約５０００の盗賊が押し寄せたという報告は昨日の

午前中に聞いていた。だが、その５０００の盗賊が壊滅したとのことだ。
しかも、たった一人の武将によって……。
「我々の軍の間諜の何人がそのときの光景を見ていたようですが……人間業じゃないとまで言っていました」
「５０００を……一人で……！？　何かの間違いなんじゃないですか？」
「間諜の全てが全く同一の証言をいたしました。この情報に間違いは無いようです」
姉であるシエナも一人で何百の兵士を相手に出来る猛者ではあるが、５０００はさすがにムリである。
ファーナの後ろに居るメリニアも目を細め、兵士の報告に耳を傾けていた。
「間諜の報告によりますと、『目を引かれるほどに深く、青い髪をした少女で、まるで村娘のようなか弱さのある少女であった。しかし、その武器はメリニア様のように先に斧のような物が付いた槍で、長さは身長の二倍程度。そんな武器を軽々と扱い、盗賊たちを殺しつくした』とあります」
「まさか、アスガルドの死神とは……」
「間違いありません。その少女のことのようです」
アスガルドの死神。いつしかそう呼ばれるようになった一人の少女が居た。
中央のアスガルドに所属している少女で、まるで感情が失ったかのように人を殺すためにそう呼ばれるようになった。
武器は大きく、掠っただけでも致命傷になる。それほどに威力のある一撃を放つらしい。
本気を出せば数万の部隊でも彼女一人で壊滅させることが可能という噂だが、今回の報告を聞いた限りでは本当のことだろう。
ファーナは鳥肌が立った。
世界の統一を目指すのならばアスガルドはいつか通らねばならな

い道。
ヴェルガという強国が居る以上特に目をかけていなかったが、アスガルドにもそのような武将が居るのならば注意が必要になる。
アスガルドとヴェルガが潰し合ってくれれば大助かりだが、それは無いだろう。
ヴェルガの王、レイラは賢くてそのようなことをするはずが無い。絶対に何かしらの行動でアスガルドの足を止めるはずだ。
さらにアスガルドの世界の皇帝を名乗る男、ヴィヴェードは狡猾で悪知恵の働く男だ。絶対にヴェルガは敵に回さないだろう。
ファーナは重苦しいため息を吐き、兵士を下がらせた。
部屋にはまたファーナとメリニアの二人きりとなってしまう。
「……アスガルドの死神、ローゼ＝ガルウェル……一度戦ってみたいものだ」
「ダメですよメリニアさん。あなたでも彼女にはたぶん勝てません。それほどに強い相手なのです」
「分かっている。だが、武人として戦わなければならないのだ」
武人の気持ちは分からない。
ファーナは頭を悩ませながらこれからの方針を考えることとした。

☆☆☆☆☆

館の長い廊下を一人の少女が歩いていた。
深く青い髪をしており、その背には彼女の武器である牙王双破（がおうそうは）が担がれている。もう少しで天井に届きそうだ。
服装はいつも彼女が着ているものと同じ。赤を貴重とした服で、上はケープ、下はプリーツのスカートといたちでたち。
いつも赤い服を着ているせいか、今の彼女もおかしくは感じない。しかし、その赤い服のところどころに黒っぽい斑点があるのは見逃せないだろう。
―血である―

先の戦争――――いや、一方的な惨殺で彼女の服には返り血が付いてしまっていた。
無論顔や手などの露出している部分にベットリと血は付いていた。
そのせいかどうかは分からないが、先ほどから近くを通りかかった人は彼女を避けている。誰だってそうするだろう。
「……」
だが、少女は何も感じない。
まるで感情が欠落してしまったかのような無表情で道を真っ直ぐに進んでいた。その道の先にあるのは自らの部屋。
道の途中で現われた一人の男を見た瞬間、彼女は足を止めた。
「おぉローゼ、戻っておったのじゃな」
しわしわの顔、白髪交じりの頭。もうすぐ死んでしまいそうにヨボヨボとしておりながらその目は野望に燃えた男。
その男は自らのことを皇帝と名乗る男。ヴィヴェード＝アスガルドである。
ローゼはこの男の事をあまり好んではいない。
だが、彼女はその感情すらも表に出さず、ヴィヴェードを見ていた。
「今回の作戦、おぬしのおかげでうまく言ったぞい。本当にローゼには助けられてばかりじゃな」
「……」
「また次の戦いのときも頼むぞ。おぬしはワシの一番の【兵士】なのじゃからな」
「……」
ローゼはコクリと一度小さく頷くだけで言葉を発しない。
もともとあまり多く物を話すほうではないのだが、ヴィヴェードの前では特に無口であった。
ただ、あまりヴィヴェードと会話をしたくないだけなのだが。
そのローゼの頷きを見て気をよくしたヴィヴェードは自らも一つ頷き

「今日はしっかりと休むのじゃ。また明日働いてもらうからのぉ」
「……わかった……」
小さくつぶやくように了承し、ローゼは自らの部屋へ歩き始めた。
ヴィヴェードのニヤリとした表情に苛立ちを感じながら……。

ＡＣＴ．００４　　ファーナの不安と世界最強の戦士（後書き）

ローゼさんは何気にお気に入りキャラだったり……。

ACT．005　少年の世界

少年が目を覚ましたとき、最初に見えたものは見たことも無い天井だった。

起き上がろうとしてチクリと体が痛み、断念。目線だけで周りを見回すことにした。

まずはじめに気になったのは部屋が木で作られているということか。

最近の主流はコンクリートが多いはずだ。一から十まで木製なんて家はペンションなどの別荘くらいしか存在しないだろう。

第二に部屋の中にはさまざまな薬品っぽいものがおかれているということだ。少々消毒液くさい。

他にもいろんな問題点はあったが、少年は特に気にしない方向性で行くこととした。

（大体、俺は一体なんでこんなところにいるんだ……？）

それが一番の疑問。

とにかく最近の記憶を思い出そうとして、ズキリと頭が痛んだ。思い出すことが出来ない。

どうすることも出来ず、とにかく自分の生い立ちや家族関係などの細かいことを思い出そうとする。

（俺の名前は山本光一（やまもとこういち）。私立高校に通う高校三年生で１８歳。一般家庭に生まれたものの、両親は８年前に死去。現在はお姉ちゃんとバイトなどをしながらギリギリの生活をしていた。）

一通りのことは思い出せるのだが、つい最近のことだけ思い出すことが出来ない。

「どういうことなんだ？」

つぶやきは口から漏れていた。

その呟きが聞こえたのだろうか。近くにいたと思われる一人の少女が光一の顔を覗き込んだ。

「起きたようだね」
「えっ？」
顔はかなり近かった。本当に少しだけ前に顔を出すだけでキスが出来てしまいそうなほど近い。
少女の息遣いは少年のすぐ傍から聞こえ、そこに彼女がいるという事実を表していた。
その少女はとても美しく、日本人とは思えないほどに綺麗な顔、さらには短くも赤い髪が特徴的であった。
光一は顔を真っ赤にしながら（体を動かせないので）少女の顔を見つめていた。
それを見た少女は光一が病気だと思ったのか額に額をくっつけて体温を測り始めたではないか。
「なっ！？」
さすがの光一も絶句する。
「どうやら熱もなさそうだ。後遺症などもなさそうだし、よかった……」
安堵からの笑顔か額から離れた少女はすこしだけ笑っていて、その笑顔は光一の瞳に焼き付いて離れない。
とても綺麗な人だなぁ。それが光一のシエナに対する第一印象であった。
「私の名前はシエナ＝ファーメル。ファーメル国の第一姫だ。お前は？」
「あ……お、俺の名前は――」
と、答えようとした所で光一は考える。
（ここって外国なのか？　彼女の髪も赤いし……なら名字と名前は逆に答えないとダメだよな……）
「どうした？」
「い、いえ、なんでもないです。俺の名前はコウイチ・ヤマモトです」
「コウイチ……呼びづらい名前だな……」

「そうですか？」
特に気にした様子も無い光一。
だが、シエナの方は少々気にしたようで、光一は質問攻めされる。
「とりあえず、どうしてあのような場所で血だらけの状態のまま倒れていたんだ？」
「あのような場所……？　倒れていた……？　俺って一体どういう状態だったんですか？」
「全身骨折。私も医者も同じ見解なのだが、まるで大きく強い何かに吹飛ばされたかのような傷だったぞ？　まぁ、その回復力にはさすがの私も驚かされるが……ほら見てみろ。骨折したというのに数時間でそのような様子はもう無い。お前は本当に人間か？」
「？」
シエナの言ったことに対して光一は首をかしげた。
そしてもう一度気を失う前のことを思い出そうとして――
――甲高い音を思い出して光一は一瞬得体の知れない恐怖を感じた――
「ッ！！！！」
「お、おい。どうした？」
「い、いえ……なんでもないです。それよりもここはどこら辺なんですか？　日本語が通じている所を見ると、日本のようだけど……」
「日本？　日本ってなんだ？」
「えっ？」
光一にはそのシエナの一言は耳を疑った。
昔でこそほとんどの国では知らぬ存在であった日本も今ではどんな外国人も知っているような国であると思っていたからだ。
いや、それ以前に日本を知らないなら何故【日本語を知っている】のだろうか？
ちゃんと会話が出来ているということは同じ日本語を話しているはずである。光一は英語が話せないからだ。
無論ドイツ語やフランス語などのその他の外国語も話せない。つ

まり、日本語で会話しているはずなのである。
なのに日本側から無いとシエナは言った。確認のために恐る恐る光一は聞いてみる。
「で、ではここはなんという国なんですか……？」
「ここはフィレディルカ、中央アスガルドよりもやや東に位置するファーメルという国」
「フィレ……？　ふぁーめる？」
光一は聴いたことの無い単語で頭をひねった。
逆にシエナはそんな光一の反応が意外だったようで、少々驚いた表情をしている。
「フィレディルカとはこの世界の名前だよ」
「フィレディルカ？　世界って……どういうことだ？　俺には全く意味が分からないんだが……」
「じゃあ君はどの国からやってきたの？」
「俺は日本の名古屋にすんでいて……」
「にほん……なごや……どこ？　それ？」
「え……？」
光一は目を大きく見開き、そしてある一つの仮説を立て始めていた。
それは現実には考えられないような突拍子もない仮説。だが、今の状況を知るためには必要な仮説。
その仮説の結果を知るために光一はたった一つ質問をする。
「ここは……ここは地球……ですよね？」
「ちきゅう？　なんだそれは？　何かの武具の名前か？」
「ほ、本当に地球じゃない……！？　じゃあ、ふぁ、ふぁーめるでしたっけ？　他にはどんな国があるんですか？」
「そんなことも分からないのか？　ファーメルの他にはヴェルガ、イールド、マフェリア、アスガルドの四国だ」
「お、俺の知っている国が無い……アメリカとか、ロシアとか、フランスとか、イタリアとか……」

「全然知らないな。本当にそれは国の名前なのか？」
その一言は光一を絶望させるのに十分な物であった。
そしてその絶望が光一に降りかかったとある出来事を思い出せるきっかけとなる。
―遅すぎるクラクション、揺れ動くライト―
（お、俺は……死んだ……？）
あの怪我で生きているはずが無い。だとすればここは死後の世界なのだろうか？
それとも……
「お姉ちゃん……」
はじめに考えたのは姉のことだった。
二人で過ごした日々はあまりにも長く、ブラコン、シスコンと呼ばれても仕方ないほどにそれぞれがそれぞれを支えあって生きていた。
だというのに、光一は一人でこちらに来てしまった。地球（あちら）に一人姉だけを残して。
「うあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
どうすることも出来ない理不尽さに、どうしようもない現実に光一は泣いた。
「……」
その光一をまるで本当の姉のようにシエナは優しく抱きしめた。
彼女が何故そのような行動をとったのかは分からない。彼女は後に「なぜかしなければならないような気がした」と語っている。
「うああ……ぁあああぁぁぁ……」
泣き続ける光一をやさしく抱きしめ、寝かしつけるかのようにやさしく髪をなでるシエナ。
やがて光一はゆっくりと泣き止み、静かに寝息を立て始めた。
「おやすみ、コウイチ」
朝は近づき、空は明るさを取り戻してゆく。
光一の異世界の一日はまだ始まったばかりであった……。

ＡＣＴ．００５　少年の世界（後書き）

どうしようもない理不尽さに人は泣いてしまうこともあります。
光一には強くあってほしいですね。それとシエナのちょっとしたお姉さん気質が意外と現れるお話でした。

次回はフィレディルカの説明的お話

ＡＣＴ．００６　　フィレディルカと地球（前書き）

夏休みなんで出来るだけ高スピードで上げていきたいと思います。
お付き合いいただける方はヨロシクお願いします。ｍ（　）ｍ

ACT．006　フィレディルカと地球

「落ち着いた？」
光一が目を覚ました時、シエナはやさしくそう問いかけてきてくれた。その問いに対して光一は小さく頷く。
彼の名でいろんなことに対して吹っ切れたのだろう。その顔は先ほどのような同様は消えていて、それでいて真っ直ぐだった。
シエナはその顔を見て「ふっ」と小さく笑みを漏らした。
「俺の顔……そんなに変……ですか？」
「い、いや。笑ってすまない。ただ、さっきまでないていた少年とは違うなぁと思ってね」
笑うのも綺麗な人だなーというのがこの時の光一の感想だ。
「えっと、いろいろ俺の中でわかったことがあります」
「ん、じゃあ聞こう」
「まず一点、これが一番大切なことなんですが、俺はたぶんこの世界の人間じゃないと思います」
その言葉を聴いた瞬間、シエナの瞳はスゥと閉じられてゆく。
何か失言をしたのだろうかと心配する光一だったが、「続けて」というシエナの言葉に従う。
「俺は向こうの世界でたぶん死んだんだと思います。なぜこっちの世界で生きているのかは分かりませんが、間違いなく一度向こうの世界で死にました。ここが黄泉の国では無いとは思いますが、とにかく死んだ俺はこちらの世界にいる……他に異世界などから来た人は？」
「……」
シエナは答えず、瞳を閉じたまま何かしらのことを考えているようだ。
光一はシエナに返答を急がせず、そのまま黙って待つこととした。それから数十秒、光一にとっては長かった沈黙が破られる。

「……いないこともない……」
「えっ！？　本当ですか！？」
さすがの光一もいるとは思っていなかった。もしかしたいるかもしれない程度には思っていたが、でも本当にいるとは思っていなかったようだ。
シエナは光一に対して一度頷くと、髪とその瞳を覗き込んだ。
少々近いその距離に赤面する光一。そんなことはお構いなしとばかりにシエナは光一の瞳を見続けていた。
「このフィレディルカで初めて世界統一をした男がいる。今から２０００年ほど昔のことだ。これは文献にある中でも最古のものだろう。その男はこの世界で珍しい黒髪を持っているだけではなく、瞳まで真っ黒だったという話だ。そう……コウイチお前と同じように」
「俺と同じ黒髪と黒い瞳……その男性の名前って分かりますか？」
「カズマ＝アリサワと名乗っていたそうだ。……さらにその男もコウイチと同じように異世界から来たという記録も残っている」
（ありさわかずま……もしかしなくても同郷だろう）
この世界にそんな日本チックな名前を持つ人間がいるわけない。
そう思い、光一はそのカズマを日本人とした。彼がもしも元の世界に帰ったのだとすれば……光一の胸に希望が沸く。
だが、その希望はシエナの一言であっさりと崩されてしまう。
「その後カズマはこの世界の中心……現在のアスガルドに城を立てて裕福に暮らしたという話だが……ん？　どうした？　なぜそんなに残念そうな顔を？」
「別に何でもありません」
光一はため息をはいて上半身だけを起こした。ずっと寝転がっていてはシエナに失礼だと思ったからだ。
それに寝転んだままというのは彼の性分にも合わなかったということもある。とにかくじっとしてはいられなかった。
「寝ていなくても大丈夫なのか？」
「大丈夫です。それよりも、この世界のことをもっと詳しく教えて

ください」
「わかった」
そう言ったシエナは光一の近くに置いてあった水を一口飲み、ゆっくりと息を吐く。
光一にも「飲むか？」と渡してきたので、光一はありがたく受け取ることとした。
飲んだ水は冷たくはなかったが、これが現実であると言う事を光一に知らせる。だが逆に心は落ち着きを取り戻してゆく。
（じいちゃんに教えてもらった『事件のときほど冷静に』って言うのがちゃんと実現できてるなぁ……ありがとう、じいちゃん）
そう亡き祖父に対して感謝の念を送りながら水を飲んだ。
「少々長くなるかもしれないが、いいか？」
「んぐ……大丈夫です」
飲み終わったコップを元あった場所へと戻し、シエナの言葉に耳を傾ける光一。
「この世界の名前はフィレディルカと呼ばれている。現在は五国が支配している」
（フィレディルカ……世界ということは、俺のところで言う所の『地球』って考えていいのかな？）
「中央に位置する国をアスガルドと呼び、そこには世界の皇帝だと名乗る男が王をしている。今のところそこまでの脅威にはなりえないためか、他の四国に囲まれながらも未だに手を出されてはいない。
そしてアスガルドから見て北に位置するのが帝国、ヴェルガ。世界でもっとも軍事力のある国で、正直言えば全ての国を同時に攻撃できるほどの軍事力を所有しているので、一番危険な国だといえる。
さらにアスガルドから見て南に位置するのが自然などに囲まれた国、イールド。穀物や果物などの生産に優れ、兵糧などのが充実しているので持久戦では特に群を抜いている。逞しく生きている者達の国だ。
アスガルドの西に位置しているのは術の国、マフェリア。呪術や

占いなどが盛んで、怪しい術を使う集団などが戦時にもよく起用される。暗殺なども得意で、ある意味では敵に回したくないタイプの国といえる。
　最後にアスガルドから東に位置するのが私の所属する国、ファーメル。その昔に酷い差別で逃げ出したものが多く、世界に反発を抱いた者達が徒党を成した国だ。その怒りは時にヴェルガすらも切り裂くほどの刃となる。
　このように今のフィレディルカは五つの国からなっているわけだが、何か質問はあるか？」
「えっと、一つだけいいですか？」
「なんだ？」
「中央であるアスガルドが世界の皇帝を名乗っているということは中央集権なんですよね？　ということは、ほとんど世界って統一されているようなものなんじゃないですか？」
「いいや」
　シエナは光一の質問に対して首を横に振った。
「今から５０年ほど前に起こった事件によって中央の権力はほぼ無くなってしまったに等しいんだ。だから皇帝とは言っても名ばかりで、今は権力も何も無いんだ」
「事件……ですか」
「そう。まぁ、５０年も前の話しだし、あまりにも馬鹿らしい事件だからほとんど語られることも無いんだけどね」
　そういわれると逆に気になってしまうのだが、シエナは気づいていないようだ。
　聞こうにも教えてくれなさそうな雰囲気に光一は肩を落としながらシエナに話の続きを促す。
「それぞれの国はそれぞれの思惑のために動いている。まぁ、細かい思惑みたいなのはファーナにでも聞いて。私から言えるのは、とにかく五国は世界統一を目標としている。だからこそ邪魔な国を排除しようと戦争しているっと言うこと」

「じゃあファーメルも戦争を？」
「そう。してる」
戦争という言葉に光一は少しだけ違和感を覚えた。それは日本人だからなのかもしれない。
日本は終戦後、戦争をしないと言い放ったから、戦争という言葉に何処と無く違和感を覚えているのかもしれない。
だが、戦争ということは少なからず殺し合い、殺されあう争いがあるということだ。
とんでもない所に来てしまった……光一はそう感じた。
「ところで、コウイチのいた世界ってどんな感じだったの？」
「俺の世界ですか？　そうですね……」
改めて自分の世界のことを語ろうとすると難しいことに幸一は気がついた。
いつも何気なく過ごしていた世界も、その世界を知らない人に説明しろといわれれば誰だって戸惑うだろう。当たり前が当たり前ではないのだから。
だが、フィレディルカと地球はあまりにも違いすぎる。
「まず、国がたくさんあります。たしか２００個……は無かったはずですけど……」
「そ、そんなに……じゃあ、争いが絶えなかったんだろう」
「少なくとも俺の国では戦争なんて無かったですよ。争いは……まぁありますけど、それでも殺し合いなんて事は少ないと思います」
「え」
そのシエナのつぶやきは当然のことだろうと光一は笑ってシエナの顔を見た。どんな驚愕の表情をしているのだろう……と。
だが、シエナの表情は光一の予想をはるかに裏切るものであった。
シエナはとても悲しそうな驚愕の表情で光一の話を聞いていたのだ。これにはさすがの光一も戸惑ってしまう。
「え、えっと……なにか変な部分がありました……？」
「い、いや、なんでもない。そう……なんでもないんだ」

あまりにも悲しそうな声でつぶやかれる言葉。うつむいてしまったシエナの表情を光一に知るすべは無い。
「そうだ。少し君を直してくれた医者に例を言わなくてはならない。後でここにもつれてくるから、コウイチも礼を言っておくといい」
「あ！！シエナさん！！」
光一の声が聞こえていないかのようにシエナは部屋から出て行ってしまう。
フィレディルカという世界で部屋にひとり残される光一。
「何かまずいことでも言ったのかな……？……俺……」
だが、その疑問に答えてくれる人は誰もいない。

ACT．006　フィレディルカと地球（後書き）

戦争の頻繁に起こる世界、フィレディルカ。
戦争の少ない世界……地球。特に戦争のない日本で生まれた光一。
その二つの違いはあまりにも大きすぎて、生まれた場所を選べない人々はその存在を知ればうらやましく思ってしまう。

次はファーナと光一の邂逅話の予定

ACT．007　ファーメルのお姫様

それから二日ほど月日が流れた。
光一の怪我もほぼ完治し（とんでもない回復力だった）、すでに床に伏せているのは逆につらい状況となっていた。
シエナも何時間かに一度顔を出してきてくれる。まれに自分の作った料理なども運んできてくれた。
そのたびに何故か男達に睨まれる光一だったが……今はもう特に気にしてもいない。
二日経ったこの日、シエナから話を持ち出された。
「だいぶ怪我もよいようだな。なら、そろそろ私の屋敷に来ても大丈夫だろう」
「屋敷……ですか」
「私達姉妹が住んでいる館だ。このファーメルの一番の中心といっても過言ではない場所だ。来るだろ？」
「えっと、分かりました」
『いいえ』と言えない日本人な光一だった。気がつけばそのまま話は流され、彼女の屋敷へと赴くこととなったのだ。
本当にこれでよかったのだろうか。光一は迷う。
フィレディルカの人ではない光一がこの世界に来てしまった事には意味があるのだろうか。
もしも来てはいけない人物なのだとしたら、シエナに迷惑がかかるのではないか。
そういった迷いが彼の心を重くする。
布団からはじめて出たとき、光一は眩暈を起こして少しふらついた。壁に手をつき、眩暈が治まるのを待つ。
「大丈夫か？」と心配顔で問いかけてくるシエナに大丈夫だと答え、壁から離れた。
眩暈は本当に一瞬のもので、すぐに収まった。大きく深呼吸して

心を落ち着かせながらこれからのことを考える。
（シエナさんの所にお邪魔するのが一番いいのかもしれない。俺はここでの生きるすべも持たないし、たぶんすぐに飢え死にしてしまうだろう。けど、命の恩人である彼女に迷惑をかけたくないのも事実）
「コウイチ？　どうかしたのか？」
「い、いえ！！　なんでもないです。にしても……服が……」
光一が気にしているのは服のダメージである。
ところどころボロボロで、さすがにみすぼらしい気がした。ちなみに、来ているのは学校の制服である学ランだ。
この世界では学校というものは無く、勉強したい人のみ個人で開かれている塾のような所で勉強するらしい。まるで昔の中国や日本のようだな。そう思う光一だった。
「私の屋敷に男物の服もある。気にするな」
「そ、そうですか」
現状に流されすぎている気がしないでもない光一だったが、さすがに断るのも気が引けるのだろう。
とりあえずシエナの屋敷に行くということで決まった。
「にしても、シエナさんの服装、カッコいいですね」
「ん？　そうか？」
この世界にポリエステルなどがあるのかは分からないが、彼女の服はまるで地球のようにオシャレであった。
襟のある少々濃い赤のジャンパーみたいなものを上に羽織り、その下にはラインの入ったブラウスのようなものを着ている。下は少々短めだが、プリーツスカートのようなものをはいており、ついているレースが可愛さを出していた。
上は基本的にカッコいいのに、スカートは可愛いのだ。何故か少しギャップがあっていい服装だと光一は感じた。
少し光一は笑っていたのだろう。シエナはほんのり頬を赤く染めながら「どこかおかしいか？」と聞いてきた。

「いいえ。普通に似合ってますよ」
「そ、そうか。それならいいんだが……」
なぜだかシエナが無性に可愛く見えた光一だった。
「それよりも屋敷に行く準備とかは大丈夫なのか？」
「準備って言われても……俺は特に荷物もありませんし、このままで大丈夫ですよ」
「わかった。では行こうか」
「はいっ！」
屋敷というフレーズで気になってしまうというのは光一もやはり男の子ということだろう。ちょっぴりワクワクしていた。
その村から徒歩2時間弱。その時間をシエナとその部隊の兵士達20人程度と歩いていく。
はじめてみる異世界の光景に光一は感嘆のため息を吐いた。
「こういった光景は珍しいのか？」
ウェンズデイ草原と呼ばれるそこは草の多い茂る中で木が生えた特殊な草原であった。もっと木が多ければ草原というよりも森だろう。
その木の隙間からの木漏れ日は優しく、特に蒸し暑さなども感じない。今の季節は何なのだろうか？
夏ではない、冬でもなさそうだ。だとすれば春か秋だろうか。しかし、木々に色の変わった場所は無い。とすれば春か。
その事を聞いたところ、シエナは「四季……とはなんだ？」と言ってきたので光一は驚いた。
「もしかしてフィレディルカに季節って無いんですか？」
「きせつ……いや、無いな。そもそも『きせつ』という言葉を私ははじめて聴いた。お前達はどうだ？」
「私も初めてですね」
「俺も聞いたことないっす」
「じゃあ季節の変化……つまり、とある時期に暑くなったり、とある時期に寒くなったりとかは……」

「無い。他の国は分からないが、ファーメルはずっとこのような感じだぞ」
「そ、そうなんですか……」
空を見上げれば太陽と思わしきものが浮かんでいる。ということはここは地球のように何処かの天体なのだろうか。
さまざまな推測が光一の頭に現われては消えてゆく。ここは地球ではない。そう考えることとした。
四季が無いとすると地球ではどの辺りなんだろう……光一は終始そのようなことを考えながら歩いていた。
やがて、町が見えてくると光一は目をきらきらさせながら叫ぶ。
「す、すげー……！！！　こんなファンタジーみたいな場所なのか……！！！」
ファーメルの王の住む町、グランファーメル。その一番奥にある大きな屋敷のような家がシエナの言っていた屋敷だろう。とにかく大きい。
その屋敷から続くように街道が延びており、商人たちが忙しく商売をしている。
あちらでは肉を売りさばき、またあちらでは見たことも無いような食べ物を売っており、童心のある光一はずっと興奮したままだった。
その光一の様子に気がついたのだろうか。
シエナは近くの店の黄色い実を二つほど買って着てくれた。
「食うか？」
「貰う」
一つだけ貰い、どうやら皮ごと食べる果物のようで、そのままシエナはカリッとかじり始めていた。
光一もガブリと噛り付く。風味は柑橘類に似ているが、甘さのほうが強く、酸味は少ない。蜜柑に似ているものの、中身の見た目はザクロに近い。
ずっと普通の食事（驚くことに和食だった）を食べていたので果

物を久しぶりに食べた光一は幸せそうな顔をした。
「これ、何て言う果物なんですか？」
「シンジェールだ。グランファーメルよりも南の方に行くと結構生っているらしい。私の好きな果実だ」
「そうなんですか。これすごくおいしいです」
「喜んでもらえてよかった」
先ほどから光一に突き刺さる兵士達の恨みがましい視線が痛いが、光一は気にしない方向で行くこととした。
（シエナさん人気者なんだろうなー綺麗な人だし、こんなにも優しいし）
シンジェールと呼ばれる果物を食べている間に気がつけば屋敷の目の前まで来ていた。
やはり女の子という事だろうか。光一はすでに食べ終わっていたが、シエナはまだあと四分の一ほど残っていた。
「さすがに食べるの早いな」
「まぁ、男の子ですし、果実なんて久しぶりに食べましたしね」
この世界にピンポン（玄関チャイム）なんて存在しないので、そのまま入るようだ。
門の所にはやはりというかなんと言うか、二人の兵士が立っており、シエナを見た瞬間に背筋ピィーンとさせた。そのまま
「「戦姫様！！　ご帰還されました！！」」
（戦姫……？）
疑問に思うが今はとにかく気にしないこととした光一。
目の前の大きな門（高さ三メートルくらい）はゆっくりと開いていき、やがて全開になる。その門をシエナは歩いてゆく。光一も置いていかれないように着いていった。
門をくぐった瞬間に庭師やら、庭にいた兵士達からいろんな視線で光一は見られた。
興味の視線、威圧の視線、好奇の視線、ほんとうにさまざまだ。
そして屋敷の目の前までたどり着くと、まるでＲＰＧのような両

開きの扉が目の前にあった。
シエナの兵士たちが二人前に出て、その両開きの扉を同時に開いてゆく。
「「「おかえりなさいませ。お嬢様」」」
扉をあけたとき、目の前には三人の着物を着た女性が頭をたれていた。
それぞれ青、緑、薄い赤の着物を着ており、年も３０代、２０代、１０代程度だろうと予想のつく年齢だった。
「誰なの？」という視線でシエナを見ると、答えは案外簡単に返ってくる。
「私の侍女だ。基本的に身の回りの世話をしてもらっている。ファーナは何処にいる？」
「部屋でお待ちです」
「分かった。これから向かうと伝えておいてくれ」
「わかりました」
一番年配だと思われる青い着物の女性がそう言うと、緑と薄い赤の着物を着た少女たちがそれぞれの方向へと歩いてゆく。
青い着物の女性は頭をたれたまま両手をシエナの前に突き出す。
シエナはその両手に腰につけていた細い剣を渡して屋敷の中へと入っていった。
「あなた様もどうぞ、シエナ様について行って下さい」
「わ、わかりました」
光一は地球でここまで恭しく扱われたことなど無いので思いっきり恐縮していた。
シエナに着いて行き、さまざまな所を見回す。
襖や庭の感じから見るとどうやらかなり和風の屋敷のようだ。玄関口は洋風だったので洋風かと思っていた光一だったが、少々肩透かしを食らったかのような気分であった。
と、シエナはとある部屋の前で立ち止まり、壁を軽くコンコンと叩いた。

部屋の扉にする行為だが、襖ではできないのだろう。和紙が張ってあるからだ。
「誰ですか？」
「私だ」
「どうぞ入ってください」
襖を開け、中に入ると中では二人の女性が畳の上に座っていた。
一人はシエナによく似た人で、髪は長く、シエナよりも４つか５つほど若く見える。
もう一人はもう少し年配の人だろうか。光一と同じように黒髪で髪は長い。ただ、瞳は青く、一番の特徴といえばその胸か。
（でっか……）
人間とは思えないほどの大きさに光一は驚いた。
「姉さん。そちらの方が異世界から来たという子ですか？」
「あぁ。そうだ。名前をコウイチ＝ヤマモトというそうだ」
どうやらシエナは光一が休んでいる間にその少女に連絡をいくつかまわしていたようだ。
説明の手間が省けて助かると光一は思った。
「えっと、コウイチ＝ヤマモトです。えっと……」
「私はファーナ＝ファーメル。こちらはメリニア＝セークリッドです」
「よろしく」
「は、はぁ、よろしくお願いします」
「姉さんもコウイチさんも座ってください」
「元からそのつもりだ」
「じゃ、じゃあ恐縮して……」
ファーナと名乗る少女は幼いながらもかなりしっかりとした人物だなというのが光一の感想であった。
だが、ファーナの視線はなぜだが光一を睨んでいた。光一は「？」と思いながらもファーナたちの説明を聞く事にした。
「で、姉さんはなんでコウイチさんを屋敷のほうまでつれてきたん

ですか？」
「あぁ、実は私に一つだけ考えがあるんだ」
何故かすごく嫌な予感のする光一。こういった感覚の時は確実に面倒事が来るに決まっている。
だが、いまさら逃げることは出来ない。光一は腹を決めてそのシエナの一言を聞く。
それはあまりにも驚愕に値することで、ファーナもメリニアさえも驚かせる内容だった。
「私は……コウイチをこのファーメルの王とする事にした」
「「え……えええええええええぇぇぇぇぇぇ！！！！？？？」」
「シエナ殿は思い切ったことをする……」
叫び声は光一とファーナの分。メリニアは驚いているのか分からないような驚き方だった。

ＡＣＴ．００７　ファーメルのお姫様（後書き）

屋敷の内部構造をどうしようかと悩んだ結果、和風とさせてもらいました。
ＡＣＴ．００４で蝋燭の描写があったので、もともと和風だと考えていたんですけど……洋風の屋敷だと思っていた方はすいませんｏｒｚ

ACT．008　異世界の日々

「ね、姉さん……このコウイチさんを王にするってどういうことですか……？」
「ファーナもカズマの話は知っていると思う」
カズマとはカズマ＝アリサワの事である。つまり、世界をはじめて統一した異世界人のことを指す。
光一と同じ用に黒髪、黒き瞳を持った少年だといわれている。
「……姉さんの言いたいことはわかりました」
「わかっちゃったの！？」
「コウイチは少し黙っていてくれ。今一番大切なところなんだ」
「はい（シュン←」
当事者なのに会話に介入できない光一。そんな肩を落とす光一の姿をみてクスクスと少女のように笑うメリニア。
ファーナはムスッとした表情を光一に向け、その瞳は少々怒っているかのように光一を睨んでいる。
光一自身は喋るなと言われたのでどうしようもなく、「ははは……」と苦笑いを漏らしながら頬を掻くという行動しか取れない。
「つまり、シエナ殿はこう言いたい訳だな。ファーメルの王はあのカズマと同じ黒髪黒い瞳を持つ異世界人である。あのカズマと同じなのだからファーメルはもしかしたら世界統一をするかもしれない……そう思わせることで味方の士気を上げて、相手の士気を下げる」
「確かに有効な手ではあります。しかし、いくらなんでも外の者を王として崇めるのはどうかと思います。まだ素性も知れてませんし……」
確かに急に「異世界から来ましたー」なんて人を信じろといわれたって無理な話だろう。ファーナの言うこともっともであった。
しかし、シエナの言ったこともちゃんとした理由はあり、その内容も十分国的利益を得ることの出来る内容でもあった。

だが、一番の問題はそこではない。
今は沈静化したもののファーメルはまだ王の座の争いでにらみ合っている状態なのである。そんな中、急に王を――しかも一族の中からではなく、外から決めたりすれば、他の一族達から反感を買うことは間違いない。
そうすれば一気にファーメルの士気も地に落ちる。さらには一族の中には商人でいくらかお金を回してもらっているところもある。そういった所からお金が回らなくなり、財政もきつくなる可能性もあった。
「これは……急に決められる内容ではありません」
だからこそファーナの出した結論は尤もであった。
シエナは一つ頷くと「考えておいてくれ」とそのまま部屋を出て行ってしまう。その場に光一を残して。
「えっと、俺はどうすればいいのかな？」
「……」
「え、えーっと……」
（お、俺何か悪いことでもしたのかな……？　何故かファーナさんにめっちゃ睨まれているような木がするんですけど……）
ファーナは先ほどから光一の事を睨むかのような視線で見続けている。
さすがにそのような視線に耐えられるような光一でもなく、オロオロとするばかりであった。
そんな光景を見てクスクス笑うメリニア。光一はわけも分からなくなり、ただ、心配そうな顔で二人のうちどちらかが口を開くのを待った。
「ファーナ殿、そのように警戒なさらずともよいでしょう。彼はかなり真っ直ぐでしっかりした男児のようだ」
「うぅぅ……姉さんが連れてきた人だから文句は無いんですけど、どうも気に食わないんです」
本人の前でそんなこと言わないでほしいと光一は思ったが、口に

出すことはしなかった。
改めてみるとファーナも綺麗な人だと光一は感じる。
姉であるシエナと同じように赤い髪。髪は長く、座っている状態で床のギリギリの所まで来ているという事は、腰くらいまであるのだろう。顔は整っているものの、シエナのような鋭い刃のような美しさよりも、幼い少女のような儚さのある可愛い顔だった。
瞳も髪と同じように赤く、その視線の先は光一をジィと見つめている。睨んでいるのだろう。
服装は姉と同じように赤を貴重としたもので、ワンピースタイプの洋服のような服であった。
正直に言えば美少女だ。それもかなり可愛いタイプの。
メリニアはどちらかといえば女性という印象の強い女の人だ。長い黒髪をした女性で、瞳は黒ではなく、綺麗な水色。
だが、よく見ると顔にまだ少女っぽさが残っているので２０代だと思われる。しかし、その体からあふれるオーラは大人の貫禄を見せていた。
一番光一の気になるのは彼女の腕から下げている徳利である。
徳利といえばお酒などの飲み物を入れる容器のはずだ。その徳利には漢字一文字、「酒」と書かれている所から見てお酒であると断定。
この世界のお酒というものに少し興味がある光一はずっとその徳利に目がいっていたのだろう。その視線に気がついたメリニアが少々笑いながら「飲むか？」と誘ってくる。
「じゃあ、少しだけいただきます」
「ファーナ殿。たしか、もう一つくらい酒用の器が無かったか？」
「ありますよ。もともとこの部屋でメリニアさんがいつも飲んでますからね。ほぼ備え付け状態です」
赤い容器を受け取り、トクトクと注がれるお酒を見る。
濁った酒ではなくて透き通った酒で、久しぶりにお酒を飲む光一はゴクリと喉を鳴らした。何気に酒好きである。

ただし、光一はその酒の匂いをかいだ瞬間にこれはやばいと感じた。
（あ、アルコール度数いくつなんだ！？　これ！？）
鼻に来る刺激は日本酒や焼酎では表せないほどのきつさ。まるでこれ一つで車のガソリンの代わりになりそうなほどだ。
だが、貰った手前飲まないわけにはいかない。
「ええーい！！　南無！！」
たかが酒と思うこと無かれ。
一口で飲んだ瞬間に光一の意識は闇の底へと落とされたのだった。

★★★★★

「ちょっ！！　コウイチさん！？」
「あちゃーそんなに強い酒かねー？」
急にバタリと倒れた光一を心配するファーナと頭に「？」を浮かべたメリニア。
光一は真っ赤な顔をしたまま畳の上でスースーと寝息を経てまま眠ってしまっていた。ファーナは呆れのため息を漏らした。
「メリニアさん、コウイチさんはどうみてもお酒に強そうな人じゃないんですから……あまり強い酒を飲まさないでください」
「そんなに強い酒なのか……？　私には普通だとしか思えないんだが……ファーナ殿も飲んでみるか？」
「いりません！！」
怒鳴って否定するもその大声で光一が起きる様子は無い。
さらにため息を吐く苦労人ファーナ。「誰かいるか！？」姉のように腹から声を出すものの、出てくるのは可愛い声のみである。
「ハッ！！　どうかされましたか？」
「この少年を適当な空き室に寝かせてあげてください」
「了解しました」
兵士はその光一を背負い、そのまま部屋を出てゆく。

後に残ったのはやはりファーナとメリニアの二人のみだ。
「あまり他人にお酒を勧めないでください。あなたの感覚と他人の感覚は違うんですから」
「そうなのか？　私はいつも同じくらいみんな酒が強いものとばかり思っていたが……わかった。これからは気をつけるとしよう」
そう言ったと同時に徳利に口をつけ、ゴクゴクとお酒を飲んでゆくメリニア。
（本当にわかっているのでしょうか……）
ファーナがため息を吐く。それはいつもの光景だ。
だが、ファーナはそんないつもの光景を見ているよりも考えなければならないことが増えてしまったことに肩を落とした。
普通に政をするだけでも大変なのにさらに厄介ごとが増えてしまったからだ。
ため息を吐いて机へと向かう。
「おや？　仕事を始めるのか？」
「今日は姉さんが帰ってくるという事で急いである程度片付けましたので仕事はもうほとんど無いです。ただ……」
「やっぱりコウイチのことを気にしているのだな？」
「……はい」
シエナに言われた光一をファーメルの王にするという計画。正直言えばファーナは反対であった。
一番大きな理由としては光一の人柄が分からないせいである。
もしも悪人であれば王にしたときにファーメルは一気に瓦解、そのままヴェルガやイールドに国土は奪われてしまうだろう。
もしも善人でも能力や、人徳、その他さまざまなものが無ければそれでもファーメルの未来はく暗い物となってしまうだろう。
少女を悩ませる問題はあまりにも大きく、あまりにも重たいものであった。
「私はあの少年の事を信頼するよ」
まるで姉のようなセリフを言うメリニア。ファーナにも分かって

いた。
　メリニアとシエナは似た所があり、シエナが認めた人間は大体メリニアも認める。それは逆もまた然り。
　今メリニアがあの光一を認めたという事はシエナも少なからず彼の事を認めているということになるのだ。
「私にだってわかっています。いえ、分かってしまうというのが正直な感想です。コウイチさんはとても真っ直ぐで、良い人です」
「なら王にしたって良いんじゃないか？　今この国は王がおらず、国の中心が無くなってしまっているも同然な状況だ。早々に王を決める事を私は推奨する」
「わかってます……私にだって……」
　太陽は空の一番高い所へと上っていた。
　まだ光一の異世界初日は半分も終わってすらいなかった。……酔いつぶれて寝てはいるけど……。

ACT．009　異世界での一日

光一が目を覚ましたとき、空はすでに茜色に輝いていた。
「ちょっ！　嘘ー！？」
お酒を飲んでから一切記憶の無い光一。逆に一口で意識を飛ばすお酒を飲んだのだからアル中を心配するが、その心配は杞憂のようだ。
ホッと胸を一撫でし、光一は部屋を見回した。
当然ながら部屋には光一以外誰もいない。和室のような部屋で、襖で二方を固められており、もう一方は壁、もう一方は障子であった。
障子からは赤い光が紙越しに部屋にもれてきている。
その他には畳しかない、いうなれば何も無い部屋に光一は寝ていた。無論布団は敷かれ、その上で寝ている。
「……誰かが俺を運んでくれたんだな……悪いことしたかな？」
お酒を飲んで潰れてしまった事を覚えている光一は少々その運んでくれた人物に罪悪感を感じていたが、唐突に考えるのをやめた。
相手も判らないのに謝るなんて若干馬鹿らしく思えたのだ。
（その相手と会った時にお礼でも言っておけば良いかな）
あまりにも適当な考えだが、実際言ってしまえばそちらのほうが正解なので問題は無い。
光一は立ち上がり、襖のほうへと歩いた。
「このままじっとしているのも面白くないし、とりあえず探検でもしようかな」
いつまでも子供気分の光一であった。
だが、襖を開けた瞬間に向こうからも誰か着ていたようで、出た瞬間に相手の頭をゴチッと胸にぶつけてしまう。
相手は女性だったようで、頭同士でぶつかるということは無かったが、なんとなく胸でぶつかるのは駄目な気がした。（出会い的に）

光一はあわてながらその女性に手を伸ばす。
「だ、大丈夫ですか！？　す、すいません……ちょっと前方不注意でした」
「いえいえ……き、きにしないでくだ～い……」
頭を押さえながら目をうるうるとさせる女性、いや、少女か。見た目は１０代だ。
短い茶髪をした子で、瞳は大きくまるで猫のようにペット的な感覚を受ける。服はこの世界の私服のような服の飢えから白い純白のエプロンを着けていた。
そして下着の色は水色。
扱けたときに足を開いてこけたせいでスカートだった彼女はそのまま光一に下着を見せるような体制のままなのだ。
光一は顔を赤くさせながら「とりあえず立ったら？」と手を伸ばす。
「そ、そうですね。ありがとうございます」
そのまま光一の手をとって立ち上がる少女。何気に女の子とタッチするのは初めてな光一は顔を真っ赤にさせた。
シエナは額と額だったのでノーカウントのようだ。
（お、女の子の手ってあんなに柔らかいんだな……）
と変体チックなことを考える光一。彼も男の子なので仕方ないといえば仕方ない。
少女は立ち上がると衣服の乱れた所を少々直し、ピシッとさせて光一の前に立った。
「私の名前はメリア＝アストゥスって言います！　コウイチ様のお世話係として派遣されました！　よろしくお願いします！！」
約９０。の角度でキッチリ礼するメリア。あまりの展開に鳩が豆鉄砲食らったかのような表情をする光一。
他人が見ればあまりにもシュールな光景に笑い出していたかもしれない。
「えっと、お世話係って言うのはどういうこと？」

「はい。コウイチ様は本日からこのファーメルのお客様という扱いになりまして……ファーメルではお客様に対しては一人に最低一人、手伝いや部屋の掃除などをするお世話係と呼ばれる人がつきます。コウイチ様の場合はそれが私ということになりました」
「そ、そうなんだ……」
「まだまだいたらないところも多いかと思われますが、よろしくお願いします！！」
また９０。礼。あまりの急展開についていけない光一はため息を吐きながら目の前のメリアを見る。
背の高さは光一の胸くらいまでしかない。もしかすると十代の前半ぐらいなのかもしれない。
メリアはとても可愛く、そのひたむきな情熱さは光一も好印象を受けるほどにすばらしいものであった。ただ、若干まじめすぎるのはあるが。
「じゃあヨロシクね。メリア……ちゃん」
「ちゃ、ちゃん！？　わ、私のことは呼び捨てでかまいませんよ！？」
顔を真っ赤にさせてそういうメリアが可愛くって光一はなんとなく虐めてみたいと思ってしまう。
だが、十代前半の子に手を出したら彼の世界では犯罪だ。中盤でも犯罪だが。
「でもいいんじゃないかな？　メリアちゃんで」
「あ、あぅぅ」
顔を真っ赤にさせて俯いてしまうメリア。世界が茜色なために判りにくいが、耳まで真っ赤になっているのが光一にはわかった。
さすがに虐めすぎたか？と光一は心配になったが、メリアは真っ赤な顔を上にあげ、光一の顔を見てニッコリと笑った。
その顔はまだ赤いが、とてもすがすがしそうな笑顔。
光一はふっと小さく微笑んで、そのメリアを見ていた。
はたから見るとまるで恋人のような二人だが、残念ながら今この

場に二人以外の人物は存在していない。
「えっと……コウイチ様、晩御飯の仕度が出来ているので食堂まで来ていただけますか？　シエナ様、ファーナ様、メリニア様がお待ちです」
そう用件だけ言うとメリアは顔を真っ赤にさせたまま走り出してしまう。よほど恥ずかしかったようだ。
メリアが角を曲がり、見えなくなった所で光一はあることに気がついた。
「ちょっ！！　メリア待って！！　俺食堂の場所わからないんだけど！！」
その後メリアに追いついた光一は難なく食堂へと行くことが出来た。

「遅いぞコウイチ」
「ご、ごめん。食堂の場所がわからなかったんだ」
和風の館では食堂も洋風の食堂ではなく、どうやら普通の和室のような場所に大きな机がおいてある場所の事を指すようである。
いつもと変わらない部屋のように思えるが、甲冑などの置物が置いてあり、それらはかなり高価なものだと判る。うかつに触らない方が良い。
黒い机の上にはまるで旅館の料理のような食事がずらりと並んでいる。この辺もやはり和風だ。
もしかしたらファーメルは日本に近い国なのかもしれない。そう感じる光一だった。
ただ、シエナやファーナ、メリニアが着ている服のデザインはどう考えても洋風で、そこだけよく判らない光一でもあった。
食堂ではすでに三人が座っており、光一も空いている席に腰を下ろす。
まだまだ机の長さは足りている（後２０～３０人くらいは座れる）

が、食べるのはどうやら四人だけのようである。
「えっと……」
光一の席は机の横の辺の一箇所。そして向かい合うようにファーナが座り、シエナの隣にメリニアとファーナが座っている。
まるで光一に対して全員が向かい合うように座っている。
「じゃあいただきましょうか」
ファーナの一言によって三人は手を合わせた。
「「「いただきます」」」
「い、いただきます……」
とりあえず箸を持って白米を口に運んだ。その瞬間、今まで食べたことの無いようなおいしさに目を光らせる光一。
（な、なんだこれ……これ本当に米なのか？　別の食材かなにかで作ったんじゃないのかってぐらいに美味いぞ！？）
「とりあえず気に入っていただけた用で何よりです」
「えっ？」
「コウイチは顔に出やすいな」
ファーナの一言で意識を元に戻す光一。メリニアに若干笑われながらも他のおかずにも手を出した。
豚肉を焼いたものや野菜、その他見たことも無いものまでさまざまな料理を口にした。その度に光一の意識は飛びそうになる。
「それよりもコウイチさん。お世話係の子は気に入ってくれました？」
「え？　あ、はい。メリアちゃんですよね？　すっごい良い子ですね」
「実はこの料理、そのメリアが作ってくれたものなのだ」
「彼女がこれを……ですか」
シエナのその言葉には驚きを隠せない光一。
「もともとメリアはこの館の料理長をしていたんだが、とりあえず経験をつませようという話でな……すまないがコウイチのお世話係とさせてもらった」

「まぁ、メリアちゃんも緊張はしていましたが拒みませんでしたし、大丈夫だと思いますけど……」
（あ、あれ？　何かファーナさんの笑顔がむっちゃくちゃ怖いんですけど……）
「メリアちゃんに手を出したら……ダメデスヨ？」
この時のコウイチはまるで首を振るだけの人形に成り下がったかのように必死に首を振っていた。
危うく首が取れそうになったとはその後の本人談である。
「それとコウイチはいきなり王というのも問題があるから、今のところファーメルのお客様ということにしてある」
「そうでした。それを伝えるのを忘れていました。コウイチさんは明日からこの館ですごして貰います。それで私や姉さん、メリニアさんが貴方を王としてふさわしい人物かどうかを判断します」
「まぁ、試験のようなものだ。気にせずがんばれ」
と、あまり心のこもっていないような応援を受けた光一。
正直光一的にはファーナに脅された辺りから全く料理を楽しめていなかったのだが、これからの事について考えているとネガティブな考えをグルグルと回ってしまう。
「ネガティブな考えをしてしまうのは体が疲れているせいかもしれない」
光一は食事をした後、自らの部屋ということになった先ほどの部屋へと戻ってきていた。相変わらず何も無い部屋である。
「そういえばこの世界にもお風呂はあるのかな？　さすがに汗で服がべとべとだ……しかもボロボロだし」
二、三日寝ていたのと車に轢かれたせいもあり、さすがに着替えやお風呂の恋しい。
とちょうどよいタイミングでメリアが部屋に入ってきた。
「シエナ様から変えの服を渡されたのでもって着ました。お召し物をお代えいたしましょうか？」
そんな羞恥プレイはしたくないと言う事で着替えは自分で出来る

と言う光一。
若干もったいなかったかなとおもう心はある。
「それよりもお風呂ってある？」
「お風呂ですか？　ありますけど……この館のお風呂は基本的に上の方しか……あぁ、お客様であるコウイチ様なら問題ないでしょう」
「よかった。ちょっとお風呂に入りたいんだけど、大丈夫かな？」
「良いですよ。私が案内します」
久しぶりにお風呂に入れるということでウキウキしてしまう。
日本人はお風呂好きなので当たり前といえば当たり前の反応だが、メリアからは変な目で見られてしまった。
気にせずお風呂の着替え場所で服を脱ぎ、出てみるとそこは確かにお風呂であった。しかも露天風呂。
温泉などでしか見たこと無い露天風呂にテンションがあがる光一。
「いやっふーい！！」
ザバーンと温泉に飛び込む。行儀は悪いものの、誰もいないなら問題はあるまい。
「……」
誰もいないなら……問題は無いのだが……。
「……えっ？」
「……な、なんでコウイチさんが……」
お風呂には、当たり前だが裸でお風呂に入るファーナがいましたとさ。

ACT．009　異世界での一日（後書き）

戦争小説なのにまだ一切戦争が出ていない上になぜこんなにもラブコメ……

まぁ、物語のテーマは「戦争の悲惨さと愛」なので問題は無いと思います。

あれ？テーマって先に教えちゃって大丈夫なんでしょうかね？

ACT．010　姉を持つ者同士の心

空には三日月よりももっと細いリングのような月が浮いている。
星のきらめきは地球よりも美しく、それでいて強い光を与えてくれるようだった。
「こ、こっちみないでください……」
「……すいません……」
光一とファーナはほとんど背を向け合うようにしてお風呂に使っていた。あがろうとした光一をファーナが呼び止めたからである。
その結果今みたいな状況に陥っているわけだが……光一は理性が悲鳴を上げるのを感じていた。
ちらりと横目で後ろを見ると欲情的な右肩がみえる。彼女の少女ではなく、女性っぽい感じであった。
シエナと違い、ファーナは髪が長いために髪を後ろの方に纏めているようだ。赤い髪が光一の首の後ろに何度か触れる。
あまり近づく必要も無いのだが、何故か二人はそれぞれの背中がくっついてしまいそうな距離にいた。
話に困った光一は先ほどからずっと星を見ている。
ファーナはそんな光一を先ほどの光一と同じように横目で見ていた。
「そんなに空が気になりますか？」
「えっ？　うん。俺の住んでいた世界じゃあこんなに綺麗に星は輝いてなかったんだ」
「そっか」
それっきりまた二人の間には沈黙が過ぎる。
お湯から上がる湯気が二人を包み込んだ。
「……」
「……」
沈黙。光一はこの沈黙を打ち破るための会話の種を探していると、

不意に後ろから声をかけられた。
「コウイチさん……」
「……何だい？」
「私って嫌な人間だと思いません？」
「へっ？」
ファーナのその質問の意味がわからず、素っ頓狂な声を上げる光一。
光一が後ろを振り向くとファーナも光一と同じように空を見上げていた。同じ星を見て、同じ星を感じているのだろうか。
「私は実はコウイチさんのことを嫌っているわけじゃないんです。コウイチさんは私が貴方の事を嫌ってると思っていたでしょう？」
「え……？」
光一的にはもしかして程度にしか考えていないことだったが、結構重大なことのようだ。
少し沈黙してから「そう思ったこともあった」とそう小さく答えた。ファーナは特に気を悪くした様子も見せない。
「コウイチさんは気がついていないでしょうけど、コウイチさんと一緒にいる時の姉さんの表情はいつもと何かが違うんです」
「シエナさんの表情が？」
「はい。だからでしょうね……私は姉さんを変えられる貴方をうらやましく思い、姉さんと一緒にいる貴方を妬んだ」
「……」
「この年になっても姉さんに近づく相手に対して嫉妬するなんて……駄目な人……って思いますよね……」
「……そんなことないさ」
光一はまた空を見上げて星を見る。その星のどこかにもしかしたら地球があるかもしれない。
この世界ではまだ宇宙に進出したこと無いのだから、地球が絶対に無いなんていえるはずが無い。もしもあるなら……。
光一の脳裏に思い浮かぶのはただ一人の女性の顔。

何年も前から一緒に暮らしてきた一人の女性の顔が光一の中で浮かんではゆっくりと消えてゆく。
「俺にも一人だけお姉ちゃんがいたんだ」
「え？　コウイチさんにもお姉さんがいたんですか……？」
「あぁ。いっつも元気な人で俺がいじめられてると必ず助けに来てくれて、俺にとってはとても大切なお姉ちゃんでした。でも、俺は向こうの世界ではなく、こちらの世界へと来てしまった……。お姉ちゃんをひとり残して……」
「一人……ご両親はどうしたんですか？」
「今から8年程前に死んじゃったよ。それから俺は祖父に山本一本流っていう剣術を習いながら学校へ行き、お金を少しずつ稼いでいくっていう生活が続いていたんだ。確かにつらい日々だったけど、お姉ちゃんと二人でだったらがんばれた。それは向こうも一緒なんだと思う。
支えてくれる人、そんな人がいれば人は強くなれるんだと俺は思った。だけど、あちらの世界にはもう俺はいない。お姉ちゃんは独りぼっちになってしまったんだ……」
「……」
「そんな俺だからこそわかるよ。姉に依存しすぎるのはダメだけど、それぞれが支えあっていけるならそれで良いんじゃないのかな？」
「コウイチさん……」
その光一の言葉はファーナの中で大きく響いて今後絶対に忘れることは無いであろうセリフとなった。
姉を持つ者同士の心は似ているようで少し違う。それぞれが感じていることは少しだけではあったが、違ったのだ。
でも根本は一緒。二人は同じようにとても優しくて、とても姉に愛されている二人だった。
だからこそ初対面であったにもかかわらずシエナは光一を助けたのかもしれない。だからこそシエナは光一を死なせたくなかったのかもしれない。

その時になってようやくファーナは姉の取った行動の意味がわかった気がした。
（どんなに危険な人物かは判らなくても、私と同じように姉を支えて、逆に支えられる人物だってわかったからこそ……姉さんはコウイチさんを助けたのかもしれない。そう……コウイチさんが何処となく私に似ていたから……）
危険な人物だからあまり近づくのはよくないと思った自分よりも姉のほうが相手の事を判っていた。
改めて姉のすごさを感じるファーナ。
「じゃあ俺はもう上がるよ。ファーナさんはもうちょっと入ってる？」
「あ……コウイチさん」
「何？」
ファーナのほうを振り向いた光一に対してファーナも光一の方を向く。
二人は裸の状態で向き合う形となった。光一もファーナも初々しいぐらいに顔が真っ赤である。
「私のことはファーナと呼び捨てにしてください」
「え？　でも君は……」
「いいんです」
（だって私にも姉さんの言った言葉の意味がようやくわかりましたから）
赤い顔をしながらファーナは光一にそういう。
同じように赤い顔をした光一はファーナの言ったことに何を感じたのかはわからない。だが、一つ頷いて「判った」と小さくつぶやいた。
「じゃあ、これからよろしくね。ファーナ」
「はい」
光一はそのとき、初めてファーナの笑顔を見たような気がした。
（私にも分かりました。姉さんの行ったとおり、彼はとても良い人

で、とても……そう、この国の王になるに足る人物でした）

お風呂から上がり、この世界の服であろう男性物の服を着て、着替え場を出る光一。

大きさは気持ち悪いぐらいにピッタリで、特に苦しいということも無かった。

自らの部屋へ戻る途中で外を見る。

外は相変わらず真っ暗で、それでいて星の輝きが全てを照らしていた。そこが彼の今いる世界なのだ。

地球ではない、フィレディルカという世界。

光一は自ら住んでいた地球の事を思い出しながら部屋へと戻る。

思い出したのは友達か、何らかのイベントか、日々の事か、それとも姉か。光一にすらわからないほどにグチャグチャな記憶の流れに光一は戸惑う。

「俺は向こうの世界に帰れるのだろうか」

できる事ならば地球に帰りたいという気持ちは光一にはあった。

だが、同時に光一は「もう地球には帰れないだろうな」という逆の気持ちすらわいていた。

人間は悩み、迷い、成長していく生き物だと誰かが言っていた気がする。彼は今悩んで、迷って、そして成長してゆくのだろう。それが彼の物語であり、この世界での彼の役割なのだから。

「ふぅー」

自らの部屋に戻るとやはり何も無い部屋にただ布団がポツンとおいてあるだけだった。

何か暇つぶしのものでも今度借りてこよう。そう考えながらも布団に入る。

一日の疲れがドッとあふれてきたかのように体を重くさせ、意識はどんどんと薄れてゆく。

「目が覚めたら地球……だったらどんなに良いことか……」

そんなことは絶対に無いとわかっている。だってここは現実だからだ。
逆にもしも次目が覚めたときに地球にいたりすればそれこそが夢という存在になってしまう。
「おやすみなさい」
誰にとも無く光一はつぶやいて目を閉じた。
その閉じられた目からは何故か涙が数滴溢れ落ちた……。

ＡＣＴ．０１０　姉を持つ者同士の心（後書き）

次はちょっと本編ではなく、地球のお話へと移ります。
とはいっても一話だけですけどね。複線などが目白押しだったり…
…意外と必見？

ACT・???　in the earth（前書き）

ACT・???は基本的に本編とは関係の無い話です。
本編では語られない真実や、光一がいるフィレディルカの謎など、
多くの伏線を張ったり、回収したりするお話となります。
しかし、それでも本編とはあまり関係ないので、本編を楽しみたい
人は飛ばしていただいてもかまいません。

ACT．???　in the earth

暗闇の中で一人の女性が椅子に座っていた。
その目はうつろで、前を向いているのに目の前の光景が見えているのかどうかすらも怪しい。
彼女のいる場所は自宅。時間は午後3時。まだ明るい時間なのに真っ暗というのはカーテンを閉めて切っているせいである。
彼女はカーテンすら開けないままずっとそこに座っていた。
周りには彼女が食べたであろうコンビニ弁当……その中身は半分以上も残ってしまっていた。
その女性の名は山本由香（やまもとゆか）。つい最近に最愛の人を亡くしたばかりの女性だ。
そう……光一の姉である。
「また部屋を真っ暗にして……」
突然、一人の女性が部屋に入って由香の部屋の電気をパチリとつけた。その女性に対しても由香は一瞥するだけで特に反応はしない。
由香の状態を見たその女性はため息を吐き、散らばっているコンビニ弁当を片付け始めた。
由香はただ黙ってその光景を見ているだけである。いや、焦点の合わない瞳で彼女が見えているのかどうかは怪しいが。
その女性は由香の親友である橘加奈子（たちばなかなこ）だ。
加奈子は由香の中学時代からの親友で、特に今の状態の由香を心配してこうして二日に一回くらいは様子を見に来てくれていた。
「ご飯もほとんど食べていないね……このままじゃあんたも死ぬよ？」
「……それならそれで……いい……」
「馬鹿なことを言わないで。あんたまで死なれたら私はどうすれば良いって言うのよ」
小さくつぶやいた由香に反論する加奈子。

だが、そういった態度をとっていた加奈子も由香の姿を見て沈黙する。なんと声をかけて良いかわからないのだ。
いつもはそのまま片付けや洗濯、洗物をしたりして帰っていたが、今の由香の状態が治る気配は無い。
もうこの状態が続いて三日目であった。
葬式が終わったのは二日前、光一が死んでから翌日の事である。あまりの速さに加奈子も呆然とその話を聞いていたのを思い出していた。
――交通事故――
光一は車に轢かれてそのまま亡くなったと言う事らしい。
その車の運転手は轢き逃げで現在警察が追っているらしいが、現場は人通りの少ない場所らしく、捕まえられる可能性は低いらしい。
怒りをぶつける先を失った由香はその怒りを自らにぶつけてしまった。だからこそのこの消沈状態だと加奈子は考えていた。
あまりに最愛過ぎる弟を殺され、その相手すらもどうする事もできない。
彼女の心を埋めているのは【絶望】しかない。
「買って来たコンビニ弁当……ちゃんと食べなよ？」
加奈子はそういって部屋を出て行く。電気はつけたままだったのだが、数分もすると煩わしく感じた由香が近くのリモコンで消してしまった。
また部屋には闇がおとづれる。まだ日は出ているので完全な闇にはならないが、それでも彼女にはその闇が心地よく感じた。
足を抱えてただただ目の前を見つめているだけ。
もしかしたら餓死をしてしまうかもしれないのに――いや、むしろ由香は餓死を望むかのようにコンビニ弁当に手を出さなかった。
体的には空腹なのだが、気持ち的には食べたくないのだ。
「なんで……なんで……」
由香の独り言はここ数日で何回も繰り返した問い。
「なんで……光一が死ななければならなかったのよ……ッ！！」

彼女の心の中にあるのは【絶望】と【怒り】。
最愛である弟を殺した人間と、そんな世界を作り上げた存在―神―に対する強い怒りの感情。
いるかどうかもわからないそんな存在を殺してしまいたくなるほどには彼女の精神はすでに病んでいた。
『怨むの？　神を』
不意に何処からともなくそんな声が聞こえた。
それは幼い少女のような声で、まるで小学生が放ったような声で。
自らの部屋を見回した由香はそんな部屋の中でひとりの少女を見た。
銀髪と言うにはいささか光沢の無い白髪。白いワンピースのような服。まるで幽霊のように浮遊し、体が光に包まれた少女。
あまりにもファンタジー過ぎる。
最初由香は自らの精神が作り出した幻影だと思っていた。そうとしか思えなかった。
だが、少女はあまりにもはっきりと、それでいて由香の目の前に確実にいる。
『あなたはコウイチを殺されて世界を怨むの？』
「えぇ……光一のいない世界なんて、私は認めない……！！！　滅んでしまえば良い！！」
『……』
悲しそうな顔をした少女に何故か由香は心を落ち着かせてゆく。
まるでこの世の存在とは思えない少女だが、何故だか由香は少女のことを知っているような気がした。
それは生き別れた母に会うような懐かしい気持ち。両の瞳から涙を流していることに由香は少し経ってから気がついた。
『あなたにはこの本を読む資格がある』
彼女が手を掲げると出てきたのは茶色い本。
ファンタジーな映画などでよく見る魔道書のような本である。
その本を少女は由香に渡した。

『この本を読んであなたが何を感じるのかはわからない。願わくば、世界の真実にきがつかん事を……』
「えっ？　ちょ、ちょっとまってよ！！」
そのまま少女は現われたときと同じように唐突にパァァと消えてしまう。
後に残ったのは由香だけ。
まるで夢だったかのように後味の悪さは残るが、手元にある本は確かに彼女が渡したもの。あれは夢ではなかったのか。
表紙はただ茶色い表紙に黒い文字でタイトルが書いてあるだけ。しかも英語だ。
「Ｆａｎｇ　ｏｆ　Ｖｅｒｕｇａ？　ヴェルガの牙……？」
それから彼女は電気をつけ、高鳴る心臓を押さえるかのように右手を胸に当てながら本を開いた。
【ヴェルガの牙】。そこにどのような事が書かれているのかを知っているのは未だ少女しか知らない。
この本が何を意味しているのかも……少女しか知らない。
だが、いつか由香は気がつくことになるだろう。この世界の真実に。

ＡＣＴ．？？？　ｉｎ　ｔｈｅ　ｅａｒｔｈ（後書き）

由香が貰った一冊の本。題名は【Ｆａｎｇ　ｏｆ　Ｖｅｒｕｇａ】。
この本に書かれている内容とは一体何なのか？
次のＡＣＴ．？？？で少しだけ紐解かれる……予定。

次からはいよいよ本編が盛り上がります。
シエナやファーナと仲良くなり始めた光一は町の人々や、兵士の皆さんと仲良くなっていきます。そんなある日、彼らの元に伝令がやってきて……。

ACT．011　剣の少女の実力

光一が世界にやってきてから約二日ほどの時が経った。
その二日間は特にする事も無かったため、町に出たり、兵士の人と無駄話をしたりして潰していた。
相変わらず食事は和風で、結構豪勢。本当にメリアが作っているのかどうか疑わしいほどにおいしい。
あれからメリアもちょくちょく光一のところに顔を出してくれている。布団を敷いたり、畳んだりしてくれるのだ。だが、光一の部屋には正直言って何も無い状態なので、掃除の必要もないし、メリアは一寸不満な様子。
それを光一は苦笑いで返すも、本人もさすがに自分の部屋に何も無いのが逆に落ち着かないようで、ファーナから何か本が無いかを聞いてみた。
結果的に貸して貰った本は三冊。「孫子」「孔子」「孟子」関連の本。彼女は光一に一体何を求めているのだろうか。
「とりあえず借りたものは読まないとダメだよな」と言う意識の元で孫子の本を開く。だが、開いた瞬間に断念。
字が読めなかった。これは孔子、孟子共に同じことが言える。しかし、その本達を手に取っているとき、光一は不思議なことに気がついた。
（あれ？　なんで俺の世界の偉人であるはずの孫子や孔子や孟子の本があるんだ？　どう考えたっておかしいだろ）
と言うことでファーナに聞きに行ったらその時のファーナは若干困った表情をしながら
「よく判らないんです。こういった本はアスガルドの方から流れてくるんですが、その際にアスガルドは何も言わずに流してくるので……お役に立てずすみません」
「い、いえっ！！　いいんです！！　ちょっと気になっただけです

から」
　とりあえず字が読めなかったということで本を返すと、ファーナから「先ずは字のお勉強からですね」と言われてしまう光一。
　勉強嫌いな光一としては受けたくないもので、苦笑いをしながらその場を逃げるしかなかった。
　結局暇つぶしのものを見つけられなかった光一だったが、とりあえず本と言う路線で固め、次はシエナにアタックする事にした。
「シエナ。何かお勧めの本とかないかな？」
　その時のシエナは部屋で自らの剣、荒天翔羅（こうてんしょうら）を手入れしているようで、ものすごく真剣な眼差しだったのを光一は覚えている。
　何か思いのこもった剣なんだなと光一は感じた。
「あぁコウイチか。本？　すまない。私はあまり本を読まないんだ。そういうことだったらファーナに聞いてみた方がいいんじゃないか？」
「聞きましたけど……字が読めなくて……」
「じゃあ私がもしも本を持っていたとしても字は読めないんじゃないのか？」
「あ」
　そういえばそうじゃないかとやっと気がついた光一。もしかしたら本当に字の勉強をする必要があるのかもしれない。
　光一は苦笑いしながらシエナに別れの言葉を言って部屋を後にした。
　結局振り出しに戻った間はあるものの、よく考えてみれば昼時となっていることに気がつく。何気に時間が経っていた。
　このファーメルの館では朝食と夜食は一緒に食べるものの、お昼やおやつタイムには特に集まって食べることは無い様で、光一はいつも食堂に行ってメリアから何か軽いものを作ってもらって食べている。
　この時も食堂に顔を出した光一はメリアを発見し、お昼ごはんの件を頼んだ。

「では拉麺（ラーメン）か炒飯（チャーハン）のどちらにします？」
「中華もあるのかよ！？」
「へっ？　これはアスガルドの方から伝わってくる料理ですけど……何かお心当たりでも？」
「い、いや……なんでもない」
アスガルドに少々興味が出てきた光一。もしかした地球世界と関わりのある人がいるかもしれないと考えながら炒飯を頼んだ。
すぐ作ってきますとニッコリ笑ったメリアにホワホワしながら出来上がるのを待つ。
対して時間もかからずに作られた炒飯を見て光一は「ま、まさか……本当に炒飯だとぅ！？」とつぶやきながら3分で完食したという。
綺麗に食べあげてくれた光一に対して「お粗末様でした」と笑うメリアはかなり可愛くて、光一はプルプルと震えていた。
「コウイチ様……？」
「い、いや……なんでもないんだ。じゃ、じゃあ、俺はもう行くから、お昼ごはんありがとうな」
「また来てくださいね」
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌ」
と意味不明な事を叫びだしながら食堂を後にした。それが今から約３０分ほど前の事であった。
それでようやく時間は現在とリンクする。

光一がその彼女の姿を見つけたのはちょうど中庭に面する廊下を歩いているときの事だった。
空気を切り裂くかのように風きりの音が響き、小さく闘気を乗せた声が聞こえる。その声はどうやらシエナのようだ。
「ふっ！！」
そんなシエナの姿を光一は探す。とはいっても隠れて鍛錬している様子ではなく、単なる素振り程度のためか落ち着いて剣を握って

いた。
光一はシエナの動きの一つ一つを注意深く見てみる。
シエナは自らの愛剣である荒天翔羅（こうてんしょうら）を右手に持ち、まるで立ち尽くしているかのようにユラリと立っている。武器を持っているのに構えている様子は無く、むしろ隙だらけだと思えるほどにジッとしていた。
だが光一にはわかる。光一も祖父に習っていた山本一本流の正式な継承者だ。彼女は立っていながらも全方向に気をめぐらせ、相手の気配をよんでいるのだ。つまり、光一の事すらはじめから気がついていたということ。
シエナは光一の方を向くと少しだけ微笑んだかのように光一は見えた。
「シエナ、鍛錬？」
ちなみに、呼び捨てにしているのはファーナと同じように昨日そう呼んでくれといわれたからである。
さすがに年上っぽい（同年代でした）シエナを呼び捨てにするのは憚れたが、とりあえず今は呼び捨てにしていた。人間順応性が高いということか。
「あぁ。最近はバタバタしていたからな。鍛錬と言う鍛錬がなかなか出来ていなくて……それよりも、私の気によく気がついたな」
「さっきの全方向にめぐらせてた奴？　なんとなくだけどね」
光一が気がついていたことにすら気がついていたというわけだ。さすがシエナと光一は心の中でほめた。
「さすがシエナ」
声にも出ていたが。
「そうだ。確か光一は向こうの世界でも何か武術をやっていたのだったな？」
「やっていましたよ。山本一本流という山本家に伝わる剣術の一種です。俺は一応それを習得していますけど……地球の……それも日本の武術ですから、この世界の殺し合いに使えるというわけでもな

いと思いますよ」
「いやいや。謙遜するな」
そしてこの時点でものすごい嫌な予感に襲われ始める光一。こういった感覚は鋭い方らしい。
シエナはそんな断ろうとする光一の両肩を手で押さえ、まるで退路は無いかのように錯覚させていた。
「私と死合おう」
「な、なんか漢字が違いませんか……？　ものすごく殺される字のような気がしたんですけど？」
「いいや、大丈夫だ。骨で済ます」
「どういう意味です！？　骨は折れるってことですか！？」
「冗談だ。とりあえずコウイチは武器をまだ持ってなかったな……もしもの時に一本常備しておいた方が良いかも知れんぞ」
「……はぁ……」
「じゃあどんな武器を使うんだ？　短めの剣？　それとも大きい剣？　金ピカの剣？」
「何ですか、その最後の金ピカの剣って。どう考えても俺が使っちゃ駄目なタイプな気がするんですけど？」
「まぁ、一般兵士の使っている【普通の剣】が一番良いだろう」
何故かその普通の剣も持っていたシエナ。光一はその剣を手に取ると、ズッシリとした重さに気を引き締めた。
別に今まで真剣を持ったことが無いというわけではなく、その重さが人の命を刈り取る重さだと光一は思っているからだ。
ちなみに光一が使う武器は普通の兵士達が使うような長剣ではなく、刀である。特に日本刀が一番好ましかった。
しかし、この世界に日本刀があるはずが無い。孔子や孫子や孟子はあってもさすがに日本刀は無いだろう。
別に光一は日本刀でしか技（技と言うよりも型みたいなもので、閃光などを放てるわけではない）が使えないわけでもない。
スゥと鞘から剣を抜く。

まだ新しく、血を吸ったことがないように真っ白な刀身が光一の目の前にある。ただ、本当に真剣で打ち合うのか？と疑問に思う。
シエナは相当強いと妹のファーナも兵士達も言っていたではないか。光一は自らの血だらけのビジョンを思い出し、身震いした。
（こ、こんな死の恐怖は車に轢かれたとき以来だ……）
とはいっても忘れがちだが車に轢かれたのは五日程度前の話である。正直つい最近の事だった。
光一は剣を両手で持って構える。正眼の構えと言い、剣道の世界では中断の構えと呼ばれるもっともポピュラーな構えだ。
右足を少しだけ前にずらし、こぶしをヘソの辺りに合わせて剣を前に構える。攻防共に扱える一番安全な構えだといわれている。
シエナの方は先ほどと同じように剣を右手で持ち、構えることも無くただ立ち尽くしている。
「いくぞ」
小さくつぶやいたシエナの言葉に光一は頷いた。
その瞬間、戦いは始まった。
「くっ！！」
次の瞬間にはすでにシエナは動き始めていた。光一の目の前でシエナの体がブレ、そして気がつけば光一の目の前にシエナがいる。
まるで瞬間移動のような動き。繰出される突きに本能的に危険を感じ、光一は剣の腹でその突きを左に受け流す。
予想外だったのはその突きの威力。剣の腹で受け流したときに軌道修正もかねていたのに剣の矛先は全くブレていないのだ。
「やぁっ！！」
そのまま受け流した力を利用して光一は反転、シエナのいた場所を切りつける。
容赦の無い一撃だが、シエナのいたはずの場所には———誰もいない。
「なっ！？」
いや、先ほどとほとんど変わらないばしょにシエナはいた。ただ、

光一の攻撃を跳躍し、それだけで回避したのだ。
あまりのアクロバティックさに光一は目を丸くし、その一瞬の時間は光一の負けを示したものだった。
スタッと着地したシエルはそのまま光一の方に向く力を攻撃の力とし、剣を胸元に突き刺した。
光一と同じように容赦の無い一撃。光一にはその攻撃を避けるすべを持っていない。必然的に吸い込まれるように光一のむねにシエナの剣が突き刺さった。
「うぎゃっ！！」
胸に当たった攻撃は大きな悲鳴を上げさせない。それ以前に刺された光一はあせりながら地面を転がる。相当痛かったようだ。
さらにあんな突き用の武器で突き刺されたのだ。死ぬとしか思えない。
「よく見てみろ。血は一切出てないぞ」
「へ……？」
痛みでグワングワンする頭を押さえつけ、ゆっくりと胸元を見ると確かに血は出ていない。
「模造品だ。私のこれは特別に頼んでもらったものでな。重さも形も荒天翔羅（こうてんしょうら）と同じだが、切れないんだ。それはコウイチの持っている剣も同じことだからな？」
「な、なんだ……そうだったのか……でも……それでも死ぬほど痛いッ！！」
我慢できずにやっぱり転げまわる光一。それを若干呆れた目で見ているシエナ。
「ウォーミングアップにもならなかったな」
「ごめんなさいでしたー！！！」
やっぱりレベルの違う人とは戦わないでおこう。そう心に決めた光一だった。

ＡＣＴ．０１１　剣の少女の実力（後書き）

読みにくい文章ですみません。
出来るだけ読みやすい文章と言うのを心がけますので、よろしくお願いします。

それと、夏休みは出来るだけ日に２個ずつ上げていきたいと思います。
私にも予定がある場合がございますので、その日はご了承願えればなと思います。
では、これからもよろしくお願いします。

ACT．012　少女と絵本とお勉強

体に何箇所かあざが出来てからシエナに開放された光一。シエナがあそこまで強いとはさすがの光一も予想外だった。
さらに兵士達の話ではメリニアとシエナはどちらが強いかわからないほどに同じくらいの強さを誇っているらしいではないか。
「この世界の女の子ってみんな強いのか……？」
男として少々自信を失う光一。別に彼の中の信念が男尊女卑なのではなく、男として女の子を守れるくらいの力は欲しいと思っている。特にこの世界は今戦火に包まれているという。その中で自分の周りにいる女の子ぐらいは守りたいと思っていた。
だが、今のまま戦いに出ても守るどころか、守られてしまうだろう。（そもそも出してもらえないかもしれない）
もっと強くなりたいと思う光一だったが、先ほどの事を考えればシエナやメリニアには絶対に頼まない方が良いと感じた。
筋肉痛のみならず、全身痣だらけになるなんて誰だって嫌である。
まだ太陽は傾きだしたばかりで、まだまだ明るさを保っている。何をしようかなーと廊下をブラブラしていると気が付けばファーナの部屋の前だった。
ドアがほんの少しだけ開いていたので、光一は好奇心から中をのぞく。
「……」
すごくまじめな顔で机に向かい、何かしら書類のようなものを書き上げていた。
邪魔しちゃ悪いかな？と考える光一だったが、部屋の中に入っていった。ここまで考えた事となす事が反対な人間も少ないだろう。
「ファーナ？」
「えっ？　あ、コウイチさん。どうされたんですか？」
仕事であろう途中で声をかけても笑顔で返事をしてくれるファー

ナに癒されながら光一はファーナの書いていた紙を見ようとする。
が、ファーナは見ようとしたのが分かったのか紙を咄嗟に隠してしまった。
「これは見てはいけません。この国の重大な書類なんですから……」
「えぇ～？　今の俺はもうほとんどこの国の一員じゃん。ちょっとくらい……だめ？」
「ダメです。国の一員がどうとかそういうことではなく、国の中枢である人の一部しか見ちゃいけない超極秘事項なんですから」
そこまで言われると見たくなるのは普通の反応だと思われる。しかし、光一はここで見たいという気持ちをぐっと抑えた。
ファーナに嫌われればこのファーメルにいる場所が絶対的になくなってしまうと感じたからである。
何気にシエナとファーメル（メリニアさんは……どうだろうか）は兵隊達からかなりの人気を誇っている。この見た目だから仕方ない。
美しくも可憐であり、プロポーションの良いシエナ派か。
少女っぽくて胸も小さいが、世話焼きで妹タイプなファーナ派か。そのどちらかに分かれている。
ちなみに、友達になった兵士にどっち派かと聞かれた光一は苦笑いを返しただけで答えはしなかったそうだ。
だが、心の中ではどっちも好き……と言う優柔不断男まっしぐらな光一だった。
「ところでコウイチさん」
「ん？　何？」
「今朝言っていた勉強の話なのですが、今日の私の仕事はこれを渡せば終了なので、これから行いますね」
「なっ！？」
思いっきり心の中で（しまったぁぁ！！）と叫んでしまった光一はさすがにその心の声を口には出さず、出来るだけ顔にも出さずに我慢した。

正直よく我慢した方だとは思う。
さすがに好意でやってくれるファーナに対してそんな事を言うほど光一は酷い男ではないのだ。
しかし、その気持ちは少しぐらいファーナに伝わってしまったようで、ファーナは少々苦い顔をしながら微笑んでいた。
「えっと……ご迷惑……でしたか？」
その顔にはちょっと悲しそうな色も混じっていて、男として光一は引けない事を悟る。
顔に少しだけ笑みを浮かべ、心から大丈夫だと思わせるような顔を心がけながら光一はファーナに向き合った。
「ありがとう。迷惑なんて感じるものか」
「はいっ。じゃあすぐにこちらの仕事を終わらせますからね」
（ゆっくりでいいからね～～）
心の中でつぶやいた言葉は誰にも届かないだろう。
嬉しそうに笑顔で書類を作り上げていくファーナを見ていた光一はこれでよかったのだと思うことにした。
いくら苦手な勉強でも、ファーナが笑顔になってくれるのならばかんばるしか無いと、まるで軟派な事を考えながら光一はファーナの部屋の隅に座り込んで彼女をずっと見つめていたのだった。
見つめられているファーナの顔が赤い理由を考えようともせずに。

正直なことを言えば、ファーナの仕事は驚くほどに早かった。
残り少し程度に言っていた書類も集めてみれば紙の厚さが数センチに上るほどに多い。さすがの光一も目を瞠（みは）った。
そのままファーナは「少し待っていてください」と書類を持ったまま部屋を出ると何処かへと歩き去ってしまう。
女の子の部屋に一人だけ。光一はそのような機会に恵まれたことにいろんな神様に感謝した。
とはいってもこの世界の事だ。地球ほど女の子らしい物はないだ

ろうと思っていた光一は先ほどから度肝を抜かされている。
入った当初はファーナにばかり目が行って気が付かないが、彼女の部屋はとても可愛らしかった。
日差しをさえぎるカーテンはピンク色で、ところどころに濃い桃色で水玉模様が書かれた地球っぽいデザインのカーテン。
布団の近くには何処かのキャラクターみたいな狐の人形がいくつかおいてあり、色も黄色や青、これまたピンクなどさまざまな色がそろっている。光一の中の異世界像と言うのが少しずつ崩れ去っていくのを本人は感じてもいた。
はっきり言ってしまえばフィレディルカはさまざまな文化、時代、歴史などを受け継いでいるようなのだ。
まるで地球から派生したもう一つの地球のような存在なのだ。
光一は少しだけこのフィレディルカという世界の秘密に近づいたような気がした。
「すみません、遅くなりました」
そう考えているうちにファーナは帰ってきた。
いつものように赤を基調とした服装を着ているが、頬が少しだけ赤い。それに少し息が上がっているところを見ると、どうやら急いで着てくれたようだ。
光一もそれには気がついたのだろう。
「ううん。全然気にしなくていいよ」
「はい。じゃあ勉強の方に移りましょうか」
「了解」
ちょっとだけ本気で勉強しようと思うくらいには光一にはファーナの気遣いが嬉しかった。
机は部屋に一つしかなく、それも背が低い、座布団に座って使うような机だった。これを使ってファーナはずっと政(まつりごと)をしているらしい。
光一は洋式の机と椅子に慣れてしまっていたためか、少々無理な体制になってしまっていたが、それでもしっかりと座ることが出来

た。
光一は胡坐。ファーナは正座。
完全に男の子と女の子で分かれる座り方は日本に近いものだった。
「じゃあとりあえず勉強するにしたがって、この本を見てください」
彼女の取り出した本はどうやら絵本のようで、表紙にはまるで少々絵の上手い子供の書いたような男の子が書かれている。
どうやら冒険物のようだ。
「これは私が小さいときに字の書き方を習った本なんです。お話も面白くて、お父様からよくこれを使って勉強しなさいといわれていました」
「へぇ～じゃあシエナも？」
「はい。姉さんもこの本を使ってこの世界の言葉を習ったんですよ。では、勉強に移りましょう」
ここからは少しフィレディルカの文字の話について語りたいと思う。
まず、この世界の文字は昔の日本のように文語と口語が分かれていたりするわけではなく、全く同じように使われているらしい。
つまり、光一の見たことが無い文章も読んでしまえば口語と大差は無いということである。
光一が読めないといった理由はただ単にどの文字がどの言葉の意味になるかわからないせいである。それさえ覚えればもう文字はマスターしたも同然らしい。
さらに光一には少しだけ嬉しい情報もあった。
地球にはローマ字と呼ばれるものがある。特に日本ではローマ字から日本語に置き換えたり、または逆に日本語からローマ字に置き換えたりもする。
その文字の形的にはハングルに似ているフィレディルカの文字だが、形式的にはそのローマ字に酷似していたのだ。
ローマ字と酷似しているということは、日本語にも酷似しているということにもなる。

つまり、Ａから始まる母音の文字、Ａ・Ｉ・Ｕ・Ｅ・Ｏと言う文字とその他の子音、Ｋ・Ｓ・Ｔ・Ｎ・Ｈ等々を組み合わせて作られるのがフィレディルカの文字と言うことだった。
ローマ字も日本語も習得している光一はその為、フィレディルカの文字を習得するのは早かった。
とはいえ、マスターするのもなかなかに難しい作業である。
その文字がアルファベットのどれに該当しているのかをいちいち考えなければならないからである。
そういった意味では結構辛い作業となった。
「にしても本当に早く覚えちゃいましたね……人間業じゃないみたいです」
「まぁ、俺のいた世界にも似たような文字はあったからね……実際おぼえることはそんなに無かったし、ファーナの教え方もうまかったからすぐ覚えちゃったよ。とはいっても、まだ完全に覚えたわけじゃないんだけど……」
「これだけ覚えていれば十分ですよ。それより、この本を一度読んでみませんか？」
「この本？」
先ほど彼女が取り出した絵本、題名を『ラフィレイルの星』と言うらしい。
その絵本は全四冊で、一冊目から起承転結でまとめられた本で、とても面白く、子供に聞かせる話としても優秀で、言葉の勉強にもなるらしい。
「にしても、ラフィレイルの星って一体どういう意味なんだ……？」
「ラフィレイルと言うのは伝説上に現われる勇者なんです。その方のなした偉業を書き綴られたのがこのラフィレイルの星なんですよ」
「あぁ……浦島太郎とか、桃太郎とかそういう類という事か……。さすがにまんま絵本だな」
「私も姉さんもこの絵本の最後の部分が一番好きなんです。だから最後まで読んでくださいね」

笑顔でそういわれると何故だかそうしなければなら無いような気がしてくるから不思議だ。
光一は少々苦笑いを浮かべながらファーナの差し出してくるラフィレイルの星を手に取った。これはまだ一巻。
読む速度の遅い光一ではその分厚い絵本一冊読むのにどれくらい時間がかかるかはわからない。でも、光一の中でこれだけはやらなければならないと思った。
（絶対に……読破してみせる……）
それが彼とファーナの約束だった。

ＡＣＴ．０１３　酒飲み少女と悪酔い少年（前書き）

書くのが遅れましたが、この作品はフィクションです。
実際の団体や人物、その他もろもろは現実とは一切関係ありません。
似ていたとしても他人の空似です。

ACT．013　酒飲み少女と悪酔い少年

ファーナから絵本を借り、その絵本を読んでいると時間はすでに夜を回ってしまっていた。
突然後ろから声をかけられた光一が振り返るとそこには一礼するメリアがいて、光一は「なんだ……」と心を落ち着かせた。
正直光一が後ろから声をかけられたときはかなりビックリしたのだ。
「メリアか。どうしたんだ？」
「そろそろ晩御飯の時間です。皆さん食堂の方へと集まっていますが……どうされますか？」
彼女の後ろの外を見ると確かにすでに真っ暗になってしまっている。
光一は真っ暗な部屋の中でずっと絵本を読んでいたということになるのだが、それはそれでちょっと怖い人かもしれない。
その為かどうかは判らないが、メリアは少し困り顔だ。
「本を読むときは蝋燭に火をともさなくては……目を傷めますよ？」
「えっ？　あ、あぁそうだね」
暗闇の中で本を読むと目を悪くするのは何処の世界でも伝わっていることらしい。
光一はそんなメリアの言葉に頷きつつその場を立ち上がり、メリアの方を向いた。
「じゃあ行くか」
「えっと……私は、いいです」
「そ、そうか。じゃあ今から行くな」
メリアは一礼して光一の部屋から出て行く。光一もそんなメリアを追いかけるかのように部屋から出て、食堂への道を歩き出した。
「あぁ、コウイチさん。これからお食事ですか？」
「あ、あなたですか。はい。これからシエナやファーナとご飯です」

途中でであった兵士に声をかけられ、光一は当たり触りのない普通の返答を返す。
何気に光一は兵士達での噂の人。かなり知名度的にも高く、以外に気さくなためか兵士達の間でも光一の噂はいろんな意味で絶えない。
ある時には実はシエナかファーナのどちらかの恋人であるという根も葉もない噂が立ち込めた時もあった。
「いいですなぁ……私も二人に混ざって一緒に食事したいものです。おっと、急ぎでしたね。では」
「はい。またどこかで」
兵士は光一が急いでいるのを察してくれたのか話を早々に切り上げ、そのまま去ってしまう。
みんなを待たせている事を思い出した光一は食堂に急いだ。
食堂の席はいつも同じ。あの初めての食事会と同じ席で食す事になるので、いつも若干光一は緊張して食事をしている。
光一が食堂に着いたときには三人ともすでに席に座っていた。
「ご、ごめん。遅かったかな？」
「コウイチ、早く座るんだ。メリアの作ってくれた料理が冷めてしまう」
「うん、そうだね」
いつもの席に座り、目の前の料理を見た。
焼き魚と白米などを中心としたかなり和風の食事で、昼ご飯に中華が出た事を考えると、誰かが和風の方がよいといっているのかもしれない。
と言うのも、晩御飯は光一、シエナ、ファーナ、メリニアの四人が一同に返すのだが、いつも和風の食事だった。三人の少女のうち誰かが和風好きなのかもしれない。
特別嫌な事もないので、光一は聞いたことないのだが。
「「「「いただきます」」」」
日本と同じ食事のときの挨拶を皮切りにみんなが箸で食事をし始

める。日本と違うのはあまり会話をしないということだろうか。
この世界では食事中の会話はマナー違反となるらしい。
静かにゆっくりと食べ、食べ物に感謝、料理人に感謝しながらご飯を食べていくのがマナーらしい。
だが、今日はシエナがそのマナーを犯した。あまり犯さなそうな人だったので光一は驚く。
「今日はどうしたんだ？　いつもはちゃんと時間通りに食堂に来るのに……」
「えっ！？　あ、うん。ファーナから借りた絵本がちょっと面白くてずっと読んでたんだよ」
「あれ読んでくれてるんですか」
「何か本を貸したのか？」
「はい。コウイチさんに勉強用にと言う事で『ラフィレイルの星』を貸したんです」
「そうか……ラフィレイルの星ならすぐにコウイチも字を読めるようになると思うぞ」
「コウイチさんはかなり読みには強いので、本当にすぐに読めるようになります。読めるようになったら、孫子とかまた貸しますよ」
「いやぁー……孫子や孔子はさすがに勘弁してもらいたいと思います……」
「シエナ殿、ファーナ殿、コウイチ殿、口を慎みください。礼儀にかけます」
「「「うっ、ごめんなさい」」」
メリニアに怒られたことによって三人はシュンとしながら食事を再開する。
まさかメリニアに怒られるとは思わなかった三人はさすがに落ち着いて食事を再開していた。若干失礼な事を言っている。
数十分すると三人は食事を終了させていた。
「ではいつものお酒タイムにはいるかな」
メリニアが取り出したのは一本の徳利。いつものお酒のようであ

る。
　シエナとファーナは苦笑いをしながら、光一は若干恐怖に頬を引きつらせながら彼女の持つ徳利を見つめていた。
　無論理由は最初の時に一口で潰されたせいである。
「メリニアさんって本当にお酒が好きですよね……何か理由があるんですか？」
「理由……か。そうだな……あるといえばあるし、ないといえばないかもしれない」
　ちょっと遠い目をしながら外に浮かぶ三日月を見つめるメリニア。そんな顔されれば「ある」といっているようなものだ。
　だが、あまりにも心のこもった遠い目だったために光一も、シエナも、ファーナも聞くことは出来なかった。
　光一はシエナとファーナの反応から彼女のその部分は二人も知らないということに気が付いた。
「まぁ、無いが。……んぐぅ……ゴク、ゴクゴク……」
「そうなんですか……。……って、ないならそんなにあるように見せかけた反応しないでくださいよ！！」
「あぁ～そんな話題聞いたことないと思ったらやっぱり嘘だったのか……」
「め、メリニアさん、あまりお戯れをなさらないでくださいよ。空気が悪くなってしまいます」
「あーすまん」
　そういいながら徳利のお酒を飲み始めるメリニア。
　正直光一から見ればその徳利はかなり大きく、そう簡単に一本開けられるようなものではないはずだが、すぐに一本開けてしまうのだろう。光一はそう思った。
　シエナとファーナは苦笑いしたままメリニアの飲みっぷりを見ている。
「おっと、そういえばシエナ殿達はお酒がありませんなぁ……メリア、少し軽めの酒を持ってきてくれ」

『あ、判りました。少々お待ちください！』
どうやら近くにメリアが控えていたようで、メリニアの一言ですぐに取りに行ったようだ。
トテトテと廊下を走る音が響く。
メリアが戻ってきたとき持ってきた徳利はメリニアが持っている徳利の3分の1程度の大きさしかない。
三人の近くに器を置き、その器にトクトクと無色透明なお酒を注いでゆく。すぐに飲みたくなる衝動が光一に襲い掛かるが、メリニアのお酒の事を思い出して少しだけ躊躇してしまう。
それに気が付いたのかファーナはニコニコと笑った。
「大丈夫ですよコウイチさん。このお酒はそこまで強いお酒ではないので、いきなり倒れるということは無いと思います」
「そ、そうですか。判りました」
光一は恐る恐る器を手に取り、ゆっくりとお酒を口に含んだ。
まろやかにそれでいてスゥーとした舌触りが光一の口に広がる。はっきり言えば”おいしい”お酒であった。
「おいしい」
「そうですか？　このお酒は私達ファーメルの名産品でもあるんですよ。だからおいしいって言って貰えると嬉しいです」
シエナとファーナもすでに飲んでいたようでメリアから二杯目を注いでもらう所だった。
光一もこのお酒ならと思い、もういっぱい貰おうとしたのだが
「すみません、この大きさの徳利では三人に二杯ずつは無理のようで……でも大丈夫です。もう一本持ってきてありますから」
「ほほー準備がいいなぁメリア」
「ありがとうございます、メリニア様」
微笑みながら光一の器に二本目の徳利のお酒を注ぐメリア。すでにこの時、何故か光一の中で危険信号（アラーム）が鳴り響いていた。
何故と思うのだが、器に鼻を近づけた瞬間に光一は全てを察した。
（ま、まさかこのお酒……すごくアルコール度数高いんじゃないの

か……？）
だが、ファーナを見ると嬉しそうに笑顔、シエナを見るとおいしそうにお酒を飲みながら光一を気にし、メリニアは一寸笑っている。
光一はプルプルと手を振るわせた。
しかしみんなの期待を背負った光一はその器を口にし、中のお酒を口に含んだ。
（あ、あとは飲み干せば……）
「ゴクン……」
バタリ。やはり倒れた光一だった……。

★★★★★

「こ、コウイチ様！？」
「……メリア、コウイチに何を飲ませたんだ？」
「えっと……先ほどと同じものを飲んでいただいたはずなんですけど……」
「どれ、私に貸してみろ。ペロ……これは……さすがに同じものではないぞ？　私の飲んでいるものよりは低いものの、それでもかなり強いぞ？」
「えぇ！？」
メリアは驚いて徳利の所を見る。容器は間違いなく同じものだが、中身は同じものではないようだ。
と言うことは誰かが間違えたのか、故意に入れ替えたのか。とにかくメリアは光一のことがかなり心配だった。
「え、えっと……どうしましょう！？」
「前の時と同じように兵士の方に連れて行ってもらいましょう」
ファーナは前のときよりもかなり落ち着いているようで、すぐに指示を出そうとする。だが、そんな四人の少女達を驚かせることが起きる。
どちらかといえば、起きたのは光一。

お酒に潰されたはずなのに急にムクリと上半身をおこし、無表情な目を器に注いでいる。
「あ、あのぅ……コウイチ様？　大丈夫ですか……？」
「……えぇ大丈夫ですよ。それよりも、”僕”を心配する貴方は誰ですか？」
さわやかな笑顔。光一が絶対に見せることがなさそうなほどキラキラとした笑顔と、いつもは使わない一人称。

☆☆☆☆☆

「いてて……」
頭を押さえながら光一が起きると、そこは自分の部屋だった。
空はすでに白みだしており、時間にすれば朝６時位だろうかと光一は予想する。
さらに何故かすごく頭が痛む。光一は痛む頭を押さえながら布団から出て、廊下へと足を運んだ。
そこにはちょうど同じように頭を押さえたメリアが現われて、彼女は少し顔を赤くしながら挨拶を交わしてくる。
「お、おはようございます。コウイチ様……」
「うん、おはよう。それよりもメリアも頭が痛いのか？　昨日何かあったとしか思えないんだが……」
「これからは絶対にコウイチ様には強めのお酒を飲ませません……！！！」
「へっ？」
頭を抑え、頬を染めたメリアはそう決心するのだった。

ＡＣＴ．０１３　酒飲み少女と悪酔い少年（後書き）

間に合った！
最近は少し忙しかったために二つ上げるのがつらかったのですが、今日は上げる事が出来ました。皆さんにはお詫びいたします。

次から少しシリアス路線、新たな仲間が加わる話へと移ります。

ACT．014　呪われた槍と一人の少女？

彼女は力が欲しいと願っていた。しかし、このような力など、臨んではいない。

「――――――ッ！！！！！」

叫び声は空に舞い、誰の耳にも届くことは無かった。いや、たとえ彼女の叫び声が世界に響いたとしても彼女を救ってくれる人は誰もいない。

一人、誰もいない町を歩く。

この村の人間はいない。この村の人間は全てその少女が一人で殺しつくしてしまったからだ。

――力――

それは一種の破壊をもたらす力だった。力を望んだ少女が手に入れた力が破壊の力。

力を願ったのはその国の人々を守りたいからなのに、自らの村を破壊してしまうなんて本末転倒ではないか。

自虐的な笑みを浮かべる少女。その笑みはまるで壊れた人間のように美しく、それでいて危ない笑みだった。

少女の手に握られるのは力。とある槍。その槍を手にしたのは数日前の事。本当に偶然手に入れた力である。

その偶然が少女の守りたいものを破壊し、少女の夢を壊し、全ての村の人間を殺しつくしてしまったのだ。

「――――ッ！」

叫ぶ。

口から叫び声はすでに漏れず、ズタズタになった少女の喉からは金切り音しか漏れて来ることは無い。

それでも少女は叫んだ。

『コロセ……コロセ……スベテヲオマエノテデ……コワシツクセ』
槍から聞こえる声を振り払うように。少女は……叫んだ。

☆☆☆☆☆

「レイラさまー」
ここはヴェルガ領の中心に位置する城の中。そこではいつもレイラ＝シンフィアが椅子に座り、妖艶な笑みを浮かべながら足を組んでいる。
そんな彼女の後ろには常に影のように一人の男が仕えている。目隠しをした男――多くの兵士がこの男の事を嫌っている。
それもそのはずだ。彼は自らの素性を何一つレイラ以外には語らず、レイラもその情報を他の者達に教えようとはしないのだから、その男はあまりにも情報が少なく、あまりにも不気味すぎるのだ。
そんなヴェルガの城で王、レイラを呼ぶ暢気な声が謁見の間に広がった。
謁見の間を警備している兵士達は「あぁ、いつもの子か」と若干ホッとした笑顔を浮かべながらレイラに走りよる一人の少女を見ていた。
体に合わないブカブカとした服装に身を包んだオレンジ色の長い髪をした少女。見た目年齢はレイラと同じくらいに見える。それは言動やその他のものにも影響しているのだが、本人はあまり気にした様子は無い。
レイラとこの少女はヴェルガでも幼女趣味の人間に好かれている少女達であった。（ただしレイラの場合はいろいろと怖いのでかなり影で支持されているようだが）
その少女の名前をビィ＝レセンティと言う。
「おや？　きょうはアールさんはいないんですかー？」
「居ますよ、ここに。キヒヒ」
アールとはレイラの影のように潜む目隠しされた男の事である。

本名をアール＝クィンツィア。全てが不明なとても危なそうな人間であり、暗殺部隊隊長である。
隊長と言うだけあって気配を消すのは得意で、まれに人から認識されないこともあるが本人は全く気にしていない。当たり前だが。
「おぉう～いましたかー気がつきませんでしたよ」
「特に気配を消したつもりは無いんですがね……まぁ、職業病と言う奴かもしれませんね」
「それよりもビィ。私に何か用だったのでしょう？」
少し微笑みながらそう問いかけるレイラ。あまりの妖艶さに彼女の身辺警護の兵士達はノックアウト寸前である。
だが、ビィとアールはそんな物は知らぬとばかりに彼女の顔を見て会話をし始める。
「実はですねー。兵隊さんたちからのほうこくで、ファーメルのブレフィアあたりでなにやらおかしな事が起こっているとのことでーす」
「おかしなこと……？　村人でも消えたの？」
「全くそのとおりでございまーす。さすがです、レイラさま」
「オヤオヤ……しかし、その事もファーメルで起きたとなると簡単に手は出せませんね。どうします？　レイラ様」
「アールは今回の事を【アレ】の仕業だと思うのかしら？」
「えぇ、えぇえぇ！！　私のこの目隠しされた【両の瞳】がうずくんですよ……ヒヒッ……確実に【アレ】がかかわってますよぉ。それにぃ」
「それに？」
「ここ数日前からファーメルでは特に目の反応がきついんですよぅ。ちょっと確認したい気持ちになりませんかぁ？」
「そうねぇ……」
そのアールの言葉を聴いたレイラは足を組み替え、思考を開始した。
彼女が思考をしている間はたとえ誰であろうと声をかけることは

許されない。それがアールでも、ビィでもである。
その時間中だけ彼女の城は静寂を撒き散らす。無音の空間が謁見の間に広がるのだ。
やがて何かしらの答えが出たのか、レイラは先ほどと同じ足の組み方に変えながらアールの方を向く。
「これからファーメルのそのブレフィアに向かいましょう。あわよくば貴方のその瞳に強く反応する相手が現われるかもしれないわね」
「そうですか。では、どれくらいの兵を連れて行きますかぁー？さすがに敵地、襲われないとも限りませんし……ヒヒ。まぁ、私一人居ればレイラ様の身辺警護なんて事足りますけどね」
「そうですねー。今回は敵地と言うことを考え、レイラさまのつよさやアールさんのつよさを考えるとー……兵１０といった所でしょうか」
「ではビィ。兵士１０の選定は貴女に一任するわ。ファーメルに合った人間を１０人選んで頂戴」
「ぎょいです～」
「アールは私と一緒にファーメルに行きましょうね」
「キヒヒ……腕がなりますなぁ……ヒヒヒ……」
ヴェルガのレイラ達は準備にいそしむこととなった。

★☆★☆★

その頃、ファーメルではヴェルガとほぼ同じような内容の伝令が着た所であった。
ファーナの部屋に伝令が少々あせって入ってきたのを見て、一緒の部屋に居た光一は驚いた顔をし、シエナは表情を真剣なものにした。とはいえ、シエナはいつも真剣な表情をしているので違いはあまり感じられないのだが。
兵士は持っていた伝令の物であろう紙を広げて中の文を読み始める。だが、シエナはそれに気がついていた。

その伝令が持ってきたはずの紙の表面は血がついており、時間が経ったものであるためか黒く変色していたのだ。それに光一とファーナは気がついていないようだ。伝令の話を一生懸命に聞いている。
「ここから北方向にある村、ブレフィアで警備兵達の連絡が途切れたので視察者を向かわせた所、村には誰もおらず――いえ、全員の死亡が確認され、この伝令を送った次第であるということです」
「全員……死亡……ですか？」
「はいっ。この文書にはそのように書かれています」
ファーナがちょっと青い顔をしながら伝令の内容を頭で繰り返す。
さすがにこの内容はシエナも意外だったのかちょっと驚いた表情をしながらファーナの意見を待っていた。こういう時はまずファーナの意見を聞くことからはじめるのが一番良いとシエナは判断したのだ。
「判りました。とにかく原因把握のために少しだけ兵を送りましょう。貴方はブレフィアの地理に詳しい人１０人程度を選定しておいて下さい」
「了解しました！！」
そう兵士は叫んでファーナの部屋を出て行く。
三人だけが残った部屋は少しだけ空気が重く、光一は出て行きたい気分になってしまう。
「にしても……村人全員が死亡するなんて、一体何があったんだろうか……？」
「あそこはヴェルガからも少し離れてますし、急に何かしらのことが起こるはずも無いんですが……」
「私が様子を見てこよう」
「「えっ！？」」
この一言にはファーナも光一も意外だったのか声を上げて驚くしかない。
何気にシエナはめんどくさがり屋で、あまり自らこういった事に声を上げようとしない。だが、今回は自ら声を上げたのだ。

「なにやら嫌な予感がするんだ。兵士達ではどうにもならないような……とても嫌な予感が」
「……わかりました。姉さんは選定された兵を率いてまず北西の村へ向かってください」
「北西？　なぁファーナ。なんでブレフィアって言う所に真っ直ぐ行くんじゃなくて、北西の村から行かせるんだ？」
「これがもしもヴェルガの進行ならば北西の村もやられている可能性があるからです。あそこはヴェルガとの国境も近く、一番激戦地となりそうな場所ですから。そこを一度確認してからブレフィアに向かってください」
「判った。それと、コウイチを連れて行っても良いか？」
「へ？　俺！？」
ファーナは少しだけ怪訝そうな顔をシエナに向けた。
だが、すぐ何かしらの事に気がついたのか一つ頷き、「判りました」とシエナに返した。
（はぁ……面倒なことにならなければ良いけど……）
しかし、光一のその願いは無残にも壊され、とても面倒なことに巻き込まれるのだった……。

ＡＣＴ．０１４　　呪われた槍と一人の少女？（後書き）

ヴェルガの牙はこの「呪われた槍と一人の少女」のお話でプロローグ終了となります。この先はいよいよ戦争へと入っていくので、楽しみにしていてもらえると嬉しいです。

ACT．015　呪われた槍と一人の少女？

ファーメルは北をヴェルガ帝国、南をイールドに接する国で、マフェリアからは最も遠い国となっている。中央にあるアスガルドにも一応面してはいるものの、どの国よりも小さい範囲でしか隣接していない。そういう意味ではアスガルドにとって攻めにくい国かもしれない（他国を経由すればその国とも戦争になるリスクを持っているから）。

現在の王であるヴィヴェードは勝算の無い戦いはしない虐めっ子のような王様のため、特にする可能性は低い。

今回の事件は北の方に位置するブレフィアで事件が起こったため、ヴェルガの仕業ではないかと心配しているわけだ。しかし、ヴェルガとは北で面しているのではなく、若干北西方向の土地に面しているので、いきなりブレフィアが襲われると言うことはまず無いはずである。

少数精鋭で攻撃したのならまだしも、それならそれでブレフィアを襲う必要が無い。そういうことでファーメルは全体的に戸惑っていた。

特にブレフィアは森林地帯にある村であるため、連絡が取りづらかったと言うのもあるだろうが、それでも連絡もよこさず（伝令は来なかった）に全滅すると言うのもおかしな話だ。

何も分らない状況での確認行動は危険だが、それでもいかないわけにはいかない。

さらに連絡も入らないほどにヴェルガの進行が早く、どんどんとファーメルに近づいているという動きの可能性があるため、シエナと光一の一行はまずブレフィアではなく、北西の村、レーゼルへとやってくるのだった。

もしもファーメルに来た伝令の報告が「救援を求む」だった場合はこんな事をせずに真っ直ぐブレフィアへ向かっていただろう。

そんなＩＦな話はおいておいて、レーゼルへとやってきた彼らはあまりにレーゼルが平和だったために拍子抜けしていた。
むしろ驚いたのは軍がやってきたレーゼル側であった。いきなり村人達に動揺が走り、さらには村長がシエナに走って近づいてくるという事態にまで発展していたのだ。村長さんはかなりのお年のようで、白髪交じりのお爺ちゃんなのにがんばって走ってきたのを見て、シエナも光一も苦笑いをせずにはいられなかったようだ。
「えっと……ど、どうなされましたか……？」
緊張しているのか、目的の分らないシエナ達にビビッているのかは分らないが、村長はちょっとビビリながらそう話しかけてくる。
「ブレフィアの方で少し事件があってな……もしかしたらヴェルガの人間が攻めてきたのかと思い、こちらを見に来たのだ。何事も無くて安心した」
「はぁ、ブレフィアですか……」
「それなら」
急に村長とシエナの会話に割り込んできたのはどこかの店のおばさんだった。
どうやらブレフィアの情報を少し持っているらしく、村長は一つ頷いて彼女にその場を任せる。
「彼女は近くの宿を経営している者でな。ブレフィアの方の食材を独自ルート購入しているんじゃよ」
「そう。それで最近ブレフィアの方からいつも来る商人さんが三日前から来ないのよ」
ここからブレフィアまでは片道で半日ほどかかる。そのため、その女性は商人に二日に一回ブレフィアに行ってもらい、食材を購入してきてもらっていたそうだ。だが、三日前にその商人を送った所、帰ってこないらしい。
「何かあったとしか思えない」
「そうですね……これから行きます？」
「馬鹿を言え。これから行ったら向こうに着くころには夜になって

いる。それに……」
　兵士に問われたシエナはちらりと光一を見る。
「コウイチが若干無理そうだ」
「は、はは……わかります？」
「初めて馬に乗るのだからここまで良く我慢したと言う所だ。今日は一日この村の宿で休み、明日の朝早くにブレフィアへ行くぞ」
「はっ！！」「御意」
　シエナのそのセリフに兵士達が元気良く返事を返した。
　もともと光一は地球の人間なので、馬に乗ったことなんて一回も無い。乗馬部だったという経験も無いから当然と言えば当然なのだが、すでにお尻の痛みはかなりの物となっていた。約2日（野宿して）レーゼルまで来たので兵士の中でも若干疲れの見え始めているものがいると言うのも理由ではあるが。
「じゃああたしの所に泊ると良いわ。２０人全員泊るとなると、あたしの所が一番広いわよ」
「ありがとうございます。では、お言葉に甘えさせていただきます」
　だが、シエナはこの村で休む事をあまりしたくは無かった。
（先ほどヴェルガの軍が来たかもしれないと言った時に3人ほど動揺を示していた……あれが変装したヴェルガの兵士だとしたら、もしかしたら大物が潜んでいるかもしれない……だとすれば）
　シエナは舌打ちを回りに聞こえないぐらいの音でして、光一を見た。
　そこには若干のほほんとした光一が兵士達と楽しげに会話をし、あのおばさんの宿屋に一緒に行く所であった。シエナも置いていかれないようについて行く。
（もしもコウイチが殺されてしまえば大変なことになる。出来るだけ守らなければ……）
　シエナは自らの腰についている荒天翔羅（こうてんしょうら）を無意識にギュッと握っていた。

部屋割りは6つの部屋、一部屋に5人ずつとシエナ、光一だけ別室と言う何故か光一とシエナ同室状態となっている。
無論反発した光一（＋兵士達半数）だったが、部屋数の問題と、お金の問題が絡んだ結果、反発はむなしくも失敗。結局今のままで落ち着いた。
現在光一はと言うと、そのシエナとの部屋の中でベットに転がっている。お尻をさすりながら。
「うぅ～お尻……すごく……痛いです」
「まぁ二日も馬に乗っていたのだから初心者ではそうなるだろう。しかし、霊欧（レイオー）がおとなしい馬とはいえ、良く馬に乗ってこれたな」
霊欧（レイオー）とは光一がレーゼルにやってくるまでに乗っていた黒毛の馬の事である。
ファーメルの中でも優秀で頭が良く、比較的大人しいと言う事で光一の馬と言うことにされているようだ。
頭が良い馬のために特に指示を出す必要も無く、光一は落とされないようにずっと手綱を握りっぱなしで二日を過ごしていた。馬にはその為ある程度乗れていたのだが、馬の上下振動がお尻に直接ヒットするのでかなりの痛みを伴ってしまうのだ。
光一はため息を吐いた。
「大体、何で俺とシエナさんが同室なんですか？　どう考えてもシエナさんは一人で個室のような気が……」
「なんだ？　コウイチは私の事が嫌いか？」
「い、いえっ！！！　そういう事ではなく、もしも間違いが合った場合と言いますか……その……男女がおんなじ部屋と言うのは……」
「ん？　なんだ？　コウイチは私の事を襲いたいのか？」
「そうじゃなくて……あの、えっと……な、なんでもないです……」
顔を真っ赤にしてそう言う光一をクスクスと笑うシエナ。絶対にわざとやっていると光一は思った。
だが、次の瞬間にはシエナはまじめな顔をし、自らの近くに置い

ておいた自分の剣を腰に付け、立ち上がる。光一の頭には「？」が浮かんでいた。
「シエナ？　どこか行くのか？　なら俺も……」
「いや、コウイチはここに居てくれ。店側からの連絡を聞き漏らしてしまう事もある」
「へ？　あ、あぁ。分った」
あまりにも怖い声でシエナがそう言う物だから光一は気が付けば了承していた。
何故そこまでシエナが彼を部屋に置いて行こうとするのかに光一は気づいておらず、シエナが部屋から出て行った後は逆に外に出たい気持ちでいっぱいであった。本当に好奇心旺盛な少年、光一である。
光一も気になったので普通の剣を手に部屋を出た。
まだしっくりこない長剣の真剣が光一の腰元についている。まだ光一は慣れない。
「でもとにかくシエナを追いかけないと……あれは何か隠しているようだし」
ファーメルの兵士が部屋の外に出た様子は無い。シエナに言われて数人がおつきの者として付いていっただろうが、今廊下には誰にも居ない。
お客様と言う立場だとすれば光一も兵士数人と行動を取る必要があるのだが、光一がそんな事知っているはずが無い。
光一が宿屋を出ると、そこは基本的に市場となっているようで、多くの店が広がっている中に買い物客がいっぱいいる。中にはファーメルと同じように見たことの無い食材も多かった。
肉屋、魚屋、米屋や果物屋、他には酒屋などの食べ物が多い。一部では装飾品も扱っているようだ。
「おや、お兄さん。このペンダントはいかがだね？　可愛い彼女さんとかに渡してやると良いよ」
「いりません。それにいませんよ、彼女なんて……」

「おや？　そうなのかい」
装飾品店で扱われていたのはガラスで作られたであろう透けたペンダントだった。確かにシエナに似合うかもしれないが、光一はちょっと買う気にはなれない上に彼はお金を持っていないのだ。
丁重に断り、言われたことに対する反発をしながら光一は装飾品店を離れた。
ファーメルの市場も光一は一度行ったことはある。あちらは多くの客、多くの商人たちによる店が多かったが、こちらは地元での販売が多いようだ。
「そこのあなた」
「えっ？　あの……俺ですか？」
光一が呼ばれたほうを振り返るとそこには一人の女の子がいた。いや、光一にはその女の子を女の子と称して良いのかは分らなかった。
確かに見た目は１２歳くらいの女の子で、長い金髪をした普通の服を着ている女の子だ。でも、その体から溢れるのは女性らしい妖艶なものだった。
こんな女の子がいるのかと光一は思う。だが、彼女こそヴェルガの王であるレイラ＝シンフィアとは光一は夢にも思わないだろう。
「あなた。先ほどファーメルのお姫さんと一緒にこの村に来ませんでしたか？」
「そうだよ。今俺はファーメルのお客さんだから……まぁ、いろいろあるんだよ。もしかしてさっきの村に入った所を見てたのかな？」
「いいえ。違いますわ」
そう言ってレイラは光一の右腕に抱きつき、光一を見上げるような瞳で光一の顔を見る。
光一はその上目遣いを見た瞬間、まるで魔法をかけられたかのように彼女以外のものが見えなくなってしまう。それが彼女の”力”だった。
「フフッ」

レイラが小さく笑い、光一の顔に自らの顔を近づけ……
「コウイチッ！！！！」
る途中で声が上がった。
「あら。やはり来ましたか。あまりにもタイミングが良いから狙ったのではないかと錯覚してしまいそうですわ」
「レイラ＝シンフィア！？　ヴェルガの兵士数人が紛れているのは気が付いたが、まさか王自ら来るとは……」
そのセリフは村の中に響いたはずなのに誰も彼女達の事に気が付いているような素振りを見せない。
レイラの軍が張った結界が彼女達の会話を打ち消しているのだ。彼女達の言葉は彼女達に強く注意を向けた人物にしか聞き取れなくなる。それはまるで人間の機能と同じで、人間の注意を払った人しか見えない、注意を払った音しか聞こえないものと同じであった。
「コウイチから……離れろ！！！」
「やはり彼は貴方達ファーメルにとって重要な人物なのかしら？だとしたら良い拾い物かもしれませんね」
「何ぃッ！？」
「へっ？　あ、あの拾い物って……俺の事ですか」
「コウイチは渡さない……たとえ――いや、お前をここで殺し、ヴェルガの力を一気にそいでやる！！」
「かかって来なさい」
シエナの手には細いレイピアのような形をした剣、荒天翔羅（こうてんしょうら）。
対してレイラの手には大きい髑髏の装飾が特徴的な大鎌、死刻天命（しこくてんめい）。
少女達は光一を中心にそれぞれの獲物を手にして睨み合う。これが後に重要となる光一とレイラの邂逅だった。

ＡＣＴ．０１５　　呪われた槍と一人の少女？（後書き）

ヴェルガの牙と言うだけあって、ヴェルガの王であるレイラさんはかなり重要な人物となります。そんな人物と主人公の始めてのお話。

この次のお話はシエナＶＳレイラと、いよいよブレフィアへと向かいます。

お楽しみに

ACT．016　呪われた槍と一人の少女？

対峙する二人の少女、シエナとレイラ。その二人をジッと見つめている光一。

だが、本当はもう一人だけこの二人の事を見つめていたのだが、光一はその事を知らない。いや、光一だけではなく、シエナすらもその存在が分らないほどにその男の存在は希薄だった。

いや、今重要なのはその男の事ではなく、二人の少女の事であった。

シエナの握る荒天翔羅（こうてんしょうら）は一撃必殺を謳い文句とした細長い武器。白に近いその武器の色はまるで、血を吸ったことのない無垢な少女のような印象を受ける上に、シエナの戦い方は基本的に舞いに近い。動きながら戦うその戦い方はさながら”天使”のようである。

レイラの握る死刻天命（しこくてんめい）は逆に黒に近い武器の色をした大鎌。棒の先にグルリと曲がった刃が付いており、ところどころについている髑髏の装飾がその武器の恐ろしさをかき立てる。シエナとは逆に”死神”と言う称号に近い。

天使と死神はにらみ合いながら相手の動きを観察している。息すらも出来ないほどに緊迫した空気が二人の間を流れている。

先に動いたのはシエナだった。

「破ッ！！！」

真っ直ぐレイラの急所、左胸にある心臓を狙って一直線に走りながら刃を奔らせた！

速い。光一が感じるのがその一言のように彼女の足は速く、それでいて驚くほどに綺麗な走り方だった。

だが、そんなシエナの速さを見てもレイラが動揺を見せることは無い。むしろ冷笑を浮かべながらグルリと鎌をまわす。

ガチンとシエナの剣の先とレイラの鎌の腹の部分が触れ合い、火花を散らせながら滑ってゆく。レイラの体の外側にシエナが流れる

ように彼女の刃をレイラは受け流したのだ。
真っ直ぐ突っ込んできたシエナはそこで体制を崩す――そのシエナに向かって大鎌は刃を向いた。
振り回すように奔った鎌の刃を見たシエナは体制を低くし、今までの走った速度を殺すことなくスライディングで鎌の下を走る。
頭の上数ｃｍと言う高さで大鎌が過ぎる。髪の毛が何本か飛んだようだが、シエナの体には傷一つ付いてはいない。それはレイラも同じだが。
「ふふっ。ファーメルの第一姫様は確かに戦場ではかなりの強さを誇るようね」
「後ろからただ戦況を見ているだけの王様とは違うッ！！！」
「さて、どうかしら？」
二人の間に少しだけ間が流れるが、また時は動き出す。先に動いたのはまたシエナ。
「やぁ！！」
「……っ！？」
シエナの動きがいつもと違うことに光一は気が付いていた。
いつもは右足で思いっきり踏み切り、体制を低めにしながら相手の急所に一突きするのが彼女の基本スキルである。それにはレイラも気が付いていたようで、今回のシエナの動きにはレイラも息を呑んでいた。
体を少しひねり、剣先を少しブラしながら一気にレイラに向かって剣を突き放った！いや、その攻撃は一発ではなかった。
瞬時に放たれるその攻撃回数は３回。だが、その三回の攻撃は同時に放たれたように見える。あまりの速さにだ。
「……くっ」
ちょっとだけ口から声を漏らしながらレイラはその三つの剣先を見つめた。その表情にはいつもの妖艶な微笑は無く、無表情が張り付いている。
避けることは可能なのか？

いや、レイラは次の瞬間にはいつもと同じような笑みを浮かべて体制を低くした。
「なっ！？」
その一瞬の動きはあまりにも早く、シエナが息を呑むのも仕方の無いことである。
シエナの先ほどの技、散華（さんか）と呼ばれる技は額、首、左胸を狙って放たれたものだった。的確に急所に突きを放っているのだが、その攻撃はすべて高い位置に放たれている。つまり、【しゃがめば避けられてしまう】のだ。
あの一瞬にレイラはその全ての突きの起動を読み、もっとも簡単な回避行動を取ったわけだ。
それがシエナの命取りとなった。
しゃがんで突きをよけたレイラは、よけられて一瞬固まるシエナの足を自らの鎌の反対側で足払いを仕掛けた。その結果、シエナは後ろに倒れてゆく。
「くッ！！」
地面に付く瞬間に右手を地面に当て、すぐに体制を戻そうとするが……全ては遅い。
ガチンとシエナの左肩を超え、鎌の先が地面に穴を開ける。鎌の刃は彼女の肩をギリギリ切り裂くかどうかと言う位置にある。
シエナには分った。これは外してしまったのではなく、わざと外した一撃であると。
「私の勝ちね」
「……なぜ？」
「え？　この体制にまでなって自らの負けを認めないつもりかしら？」
「ちがう。何故その鎌を私の体を突き刺すのに使ったのではなく、地面を抉るだけにした！？」
その言葉を聴いた瞬間にレイラはクスクスと笑い、大鎌を地面から抜き出して自らの肩に担いだ。

「単なる気まぐれよ」
そう一言を残してその場をトタトタと去ってゆく。後には呆然としているシエナと光一だけが残っていた……。

「くっ！！」
シエナは悔しそうに唇をかみ締めていた。
場所は先ほどの宿屋。二人はあの後部屋に戻り、日が暮れ始めるまでボーっと椅子に座っているだけだった。それでも、二人の思っていることは同じであり、あの女、レイラ＝シンフィアの事である。
王でありながら強く、確実にシエナを殺せる強さを持っているのにシエナは生きている。シエナはそれに無性に腹が立った。
別にシエナは死にたかったわけではない。ただ、まるで殺されない理由が【殺すにたる人物ではない】と言われているような気がしたからだ。
彼女にとって力とは武であった。少なからず彼女は自分の武に自信を持っていた。
だが、レイラと戦った彼女の結果は惨敗。殺されたのであれば妹や光一、兵達が悲しむのは分っているが、ここまで悩むことは無かったであろう。
悩み続けている自分自身にすら彼女は腹を立て始めていたのだ。
マイナスな考えはマイナスな考えを呼び、その結果は泥沼状態のようにマイナス思考の海に落とされてしまう。
「……シエナ……」
そんな彼女の心の動きが光一には伝わってきているのだろう。
光一も少なからず心を消沈させ、まるで彼が戦いに負けたかのようにシエナを慰めていた。
その光一の慰めが、逆につらく感じるシエナ。
「すまない……コウイチ」
「え？　な、なんでシエナが謝るんだよ。むしろ謝るべきだったの

は俺のほうじゃないのか？」
「……？」
「俺はただ見ていることしか出来なかった。もっと俺に強さがあればシエナと共に戦い、あの人に負けることも無かったと思う」
それは違う！！シエナはその場で思いっきりそう叫びたかった。
（コウイチは私達ファーメルの王になるべき人だ。そんな人を護りきれなかった私が悪いのに……なぜお前が謝るんだ……）
光一の一言が逆にシエナの心を強く揺さぶり、今まで異常にシエナの心は動く。
悔しさ、悲しさ、後悔、劣等感などのさまざまな感情が彼女の胸に溢れ、心を強くゆさぶる。

――無能――

いつかどこかで誰かに言われたセリフが蘇った。

――お前は無能で使えない愚か者だ！！――

（ちがうっ！！）

――お前は生きているだけで周りに災厄を呼び込む姫なのだ！！――

（ちがうっ！！！！！）

――お前が生きている限り災厄は消えない、お前は死ぬべきなのだ！！――

（ちがうっ！！！！！　私は……）
「私は……無能なのかな……？」

「えっ？」
その声は今まで光一の聴いたことが無いほどに弱々しい声で、一瞬本当にシエナが声を発したのか光一は疑ってしまった。
あまりにも弱い声。それは彼女の心をそのまま表したような声であった。
「私は昔から無能だといわれ続けた……それをいつも否定していたんだ……でも、今回のようなことがあると私はいつも自分の言葉を疑ってしまう」
無能ではないという自分自身の言葉に彼女は疑問を抱いてしまう。
いや、本当に恐ろしいのは無能と言う事で全ての人から頼られなくなり、捨てられ、そんな未来が怖いのかもしれない。
シエナも一人の女の子であると言う事に光一はフッと小さく笑った。
「いいや。シエナは無能なんかじゃないよ。むしろ俺自身が無能なんじゃないかって思えるくらいさ。俺は戦う力も持たないし、ファーナのように政治をする事も出来ない。メリニアさんのようにお酒に強いわけでもない。皆と比べて俺はあまりにも劣っているんだ」
「でも……」
「『でも』は無しだよ。俺は君の事を無能だなんて思わないし、兵士の皆だって思っているはずが無い。俺は無能と言うのは、失敗してそこであきらめ、自らたちがある事を忘れてしまう人の事を言うんだと思う。シエナ、君は無能なんかじゃない。立ち上がって、また前を向いて歩き出せばいいんだ。そしてレイラと再戦して、今度は勝てば良いんだよ」
「コウイチ……」
「難しいことかもしれない。でも、俺はシエナなら出来るって信じてるよ」
光一のその言葉がどれほど彼女の救いになったのかは光一自身分らない。だが、少しも支えにならなかったということは無いだろう。
だって、シエナは立ち上がり、すでに前を向き始めていたのだか

ら。
っと、唐突にドアが二回叩かれた。この国にもノックと言う習慣が一部あるらしく、本当に一部の兵士が稀にノックをする。
コンコンと言う乾いた音がシエナと光一にとって妙に新鮮な音に感じられた。
「いく――シエナさん。晩御飯はどうされますか？」
”戦姫”と呼ぶのをやめて”シエナさん”と呼び変えたのは、彼女の役職が村の人達に知られるのを防ぐためであるが、どう考えても意味は無さそうである。
どちらかといえばシエナが戦姫と呼ばれるのを嫌い、こういった機会に直させようとする動きのようだが、ムリであろう。
「今行く。皆で一緒に食事をとろう」
「はっ！！　では皆にその事を連絡いたします」
「頼んだ」
彼女はちょっぴり笑っていて、光一もそんな彼女に微笑みかけた。

☆☆☆☆☆

「にしても殺さなかったんですね、キヒヒ。私(わたくし)だったら確実にあのファーメルの姫を殺していたでしょうに」
レーゼルからヴェルガの領土へと入っていく馬の一団があった。無論レイラ達の事である。
レイラは白い馬に乗り、その隣を漆黒で赤い瞳の馬に乗った目隠しの男、アールが付いて進んでいる。
すでに暗くなり始めているというのに彼らの動きはとどまらず、そのまま夜になっても進み続けるだろう。ヴェルガの兵士達もかなり屈強のようだ。
「別に、単なる気紛れよ。本当にただの気紛れ……だけど」
「だけど？」

「あの子を生かしておいた方が後々面白そうな事になりそうだから……かしらね？」
「キッヒヒ……レイラ様もお暇な方ですな」
そのアールの無礼でもある言葉にレイラは反応を示さなかった。
レイラの一番気になるのは黒髪の少年、つまりは光一の事だ。
「アール、あのときの戦いを全部”見て”たでしょ？」
「えぇ。全てを見ていましたよ。それが？」
「あの男の子……どう感じた？」
「あのファーメルのお客とかいう子供ですか？　そうですね……いうなればこの世界とは違うオーラを身にまとった少年でしたね。特にそれ以外には何も感じませんでしたが。……何か気になることでも？」
そのアールの言葉に対して首を横に振ったレイラ。
「いいえ。なんでもないわ。さっき言った事は忘れなさい」
「はぁ……レイラ様がおっしゃるのならば忘れましょう」
アールにはそう言うが、レイラはずっとその少年の事を気にかけていた。
（黒髪、黒い瞳……もしも彼がカズマと同じだとするのなら、今のフィレディルカの硬直状態を動かす鍵となるかもしれない。この世界に良い風を起こしてくれるかもしれない）
ヴェルガの王、レイラ＝シンフィアは夕暮れに染まり始めた空の下で薄く笑ったのだった。

ACT．016　呪われた槍と一人の少女？（後書き）

今回は何気にシエナが落ち込むお話。シエナも年頃の女の子であり、人間であるのだから悩む事はあるのです。

次回は本格的に「呪われた槍と一人の少女」のお話へと入ります。題名が「呪われた槍と一人の少女」のくせして？以降本題に触れてませんね（汗）

がんばります

ACT．017　呪われた槍と一人の少女？

チュンチュン。

まるで漫画の世界のような鳥の鳴き声が光一の耳朶をうった。モゾモゾと動きながら窓の外を見ると、すでに空は白みかけ、朝に差し掛かっていた。

反対方向を見る。そこにはシエナが静かに寝ており、いつもの大人っぽい冷静な表情はそこになく、昨日のような悲しみを湛えた表情もなく、ただ子供のように無邪気な寝顔がそこにはあった。

フッと光一は小さく息を吐く。とりあえず最初に思い出したのは昨晩の事。

あの後ファーメルの兵士達と一緒に晩御飯を食べたまではよかったのだが、兵士の一人が持ち出したお酒によってその場は宴会へと発展して行った。別に酒が強くて光一が倒れたのではなく、むしろ倒れたのは兵士達のほうだった。

この地方のお酒はおいしいらしく、ガバガバと飲んだ兵士達は一人ずつバタリと倒れ、中にはそのまま寝て、中には酒乱で暴れだす者がいて、大変な事となったのだ。

シエナは光一と同じように少しずつ飲んでいたので酔ったと言う事はない。

っと、昨晩の事を思い出して身震いする光一。

実際よって暴れた者の中には剣を抜き、光一に襲い掛かったものまでいた。酔った勢いなのか、かなりマジになって追いかけてくる兵士から逃げ惑い、シエナに助けられた頃には宴会も半壊、すでに兵士の９割程度が潰れた後だった。

「しかたない……コウイチ。こいつらを部屋まで運ぶのを手伝ってくれ」

「え、えぇぇぇ！？」

逃げまくって疲れた体に鞭を打ち、兵士達を必死に運んだシエナ

と光一（特に光一）。鎧を着ていない事が幸運であった。
そんな昨晩の事を思い出しながら光一はゆっくりとシエナの寝顔を盗み見る。
いつも冷静なシエナだが、寝ているときだけは本当に子供のような表情を浮かべている。それは、いつもは隙を見せないシエナの無防備な姿。
ゴクリと喉が鳴る。光一はシエナの寝顔を前に自らが緊張している事に気が付いていた。
（な、何を緊張しているんだ……？　相手はシエナだぞ？　命の恩人のシエナなんだぞ？　この程度の表情で……）
視線は美しい赤い髪へと行き、その後に閉じられた瞳へと移る。その後には小さく開いている口元へと視線を移した。
息を吸い込んでいるのかは分らないが、シエナの唇は少しだけ開いていた。規則正しい呼吸の音と同時に彼女の布団は揺れ、それが逆に光一の心拍数を劇的に上昇させていることとなっているのだが、寝ているシエナにはそんな事分るはずもなく。
唇に視線を移した硬直して動かない光一。
（い、今なら狙えるんじゃないのか……？）
狙えるとは無論シエナの唇の事だろう。寝ている間にキスを奪うとは光一もなかなかの鬼畜である。
（まて。それはいくらなんでも人としてやっちゃいけないんじゃないのか？）
『いいんじゃないのか？　シエナの寝顔を見てみろよ。こんな機会は絶対にもう現われない。それなら今行くしかねぇんじゃないのか？』
心の中の悪魔が光一にそう語りかけてくる。
『ダメだよ！！　シエナは光一を信頼してるから無防備なんだよ？　その信頼を裏切っちゃダメだよ！！』
『あぁあん？　天使？　てめぇ誰の言葉の反対を言ってやがるんだ？　民主主義なめんじゃねぇぞコラ』

『民主主義が聞いて呆れるね！！　君の言葉は単なる暴君のような言葉だよ？　もっと歴史に目を向けて見てよね。全く……これだから単細胞は……ふぅ』
『てめぇ……パンが無ければお菓子でも食っていれば良いじゃねぇかこの筋肉がッ！！　とでも言いたそうだな！？』
『どこのアントワネットと筋肉人よ。やっぱり単細胞ね』
『ムキャー！！！』
（な、なんなんだ俺の心の中は……？　なんでこんなにカオスなんだよ……）
いろんな言葉がどう考えてもネタとしか思えない天使と悪魔の発言。
むしろそんな天使と悪魔が心にいる自分自身がダメなのかもしれないとちょっぴり不安になる光一。結局キスするか否かでムンムンと悩んだ結果……
「ん……コウイチ……？　もう朝なのか。意外とお前は起きるのが速いんだな」
「えっ！？　あ、は、はい……」
シエナは目を覚ましてしまっていた。
ばっちりと目と目が合う。とても綺麗な焔のような瞳が光一をパチクリと見つめ、そんなシエナの瞳に光一は見とれている。
無音世界のように沈黙が流れるも、光一にとっては心地よくあるがあまり長居したくない世界。強く心臓が鳴り響き、心臓が壊れてしまうかのような錯覚を受ける。もちろん、そんな物は１００％錯覚で、心臓が壊れてしまうわけがないのだが。
シエナはモゾモゾと動き、布団から出てくる。光一も魔法が解けるが如く同じように布団から這い出てきた。
「今日はいよいよブレフィアへ向かう。準備をしっかりとしておけよ」
「は、はいっ！！　とは言っても、俺の準備って言ってもこの剣をただ引っ提げるだけなんですけどね……」

「いいさ。昨日のような事が起こった時にもしも回りに誰もいない時はそれを使うと良い。だが、単に使えば良いという話でもない」
シエナは真剣な顔をして光一を見つめる。
だが、光一にはシエナのその真剣な表情の裏にある『心配』と言う強い気持ちに気が付いてもいた。
「剣を抜けばそれは『戦う覚悟』を表したと言うことになる。戦いとはつまり、生きるか死ぬか……殺すか殺されるかと言う背反する二つの結果をもたらす行為だ。剣を抜けば相手はこちらの覚悟を見て、自らの武器を手に取り、戦うことになるだろう」
「つまり……下手に相手を刺激しないほうがよい時もあるって事ですか……？」
「そういう事だ。とにかくお前は自分の命が助かる可能性を考え、行動するんだ」
そのシエナの言葉は光一にとっては重たい。
平和と言われている日本からやってきた光一には未だに戦争と言うものに対してピンと来るものはない。しかし、シエナのその一言は、光一の中にある『他人事』と言う気持ちすらも打ち砕いてしまう一言だった。
光一はまだこの世界を何処と無く『夢の世界』だと思っていたのかもしれない。本人は気がついていないが。
「じゃあ朝食でも貰うか。他の奴らもそろそろ起きてくる……あー昨日のアレのせいで起きれない奴は多そうだな……」
「ははは……ですね……」
無論昨日の事とはあのお酒での暴動の事である。光一も苦笑いを返すことしかできない。
「まぁ、いい。今朝は私と一緒に二人でどこか食べに行こう」
「えっ？　二人だけでですか？」
「まだレイラ達がいる可能性もあるから一人で行くのは危険だろ？
私は次は絶対負けないさ」
「……えぇ。一緒に行きましょうか！！」

光一とシエナは腰に剣を付け、宿屋を後にした。

レーゼルの市場でもっとも特徴的な点といえば、ファーメル城下街の市場よりもどちらかと言えば食料品が多い。逆にファーメル城下街には多くの地方から来る商人がいるため、食料品のみならず地方の特殊な品物や、変わった置物や、どう考えてもガセな物（龍の珠など）が多い。

食べ歩いたりするにはレーゼルの市場はファーメルに比べてよいかもしれない。

「にしても、人が多いですね……」

「朝は何処の市場も人が多いよ。朝だけじゃなくって、日が暮れ始めた夕方も多い」

「なるほど。主婦が買っていったりするんですね」

その辺は日本も似たようなものだと光一は考える。

特に夕方の方では主婦が多く、学校帰りなどでも両手に多くの食料品を持った主婦の方々を見つけることが出来る。他にも、光一は姉である由香と交代で買い物をしていたため、特売品をその主婦達と争った経験もある。

本人にとってはあまり良い記憶ではないが。

「とりあえずコウイチはこっちの地方の食べ物は全然知らないんだよな？」

「何処の地方でも知りませんけど……レーゼルはどんな物が良く食されているんですか？」

「ここは特にヴェルガに近い。その為かどうかは分らないが、ヴェルガの料理の一部がこっちの方まで流れているんだ」

「へぇ～」

「中でもハンバーガーと呼ばれるものは食べやすく、それでいて中々に美味だぞ？」

「ぶっ！！！　は、ハンバーガー！？」

「どうした？　ハンバーガーってやはりおかしな名前だよな……コウイチもそうは思わないか？」
「い、いやぁ……」
たぶんそれはファーメルが全体的に和・中華タイプだからだろう。だからハンバーガーと言う発音がしにくいのだろうが……シエナの発言は結構危険だった。
「それにしても」と光一は空を見上げながら考える。
（ハンバーガーってどう考えても俺の世界の食べ物だよな……何でヴェルガに……？　そういえば少し前にメリアに炒飯作ってもらったっけ？　アレは確かアスガルドの方から流れてきてるって言ってたけど……もしかしてアスガルドからヴェルガの方にも何らかしらの物が流れているのかもしれないな。
この世界もまだまだ分らないことばかりだ……）
「どうした、コウイチ？」
「い、いえ。なんでもないです。それよりも、朝食はハンバーガーにするんですか？」
いうなれば朝マックみたいな感じになるのかもしれない。ハンバーガーの具は分らないけど。
光一はにこやかに聞いているが、心の中はかなりの苦笑いで埋め尽くされていた。まさかこっちの世界に来てハンバーガーを食べるなんて思っても見なかったからだろう。
「そうしよう。ちょうどそこにハンバーガーのお店がある」
シエナの指差した先はたしかに「ハンバーガー」と書かれた看板を下げたお店が開いていた。
にしても、こんな朝から営業しているのは嬉しい。時間で言えばまだ6時か7時くらいのはずだ。
「いらっしゃい」
仏頂面のおじさんが近づいてきた光一とシエナに声をかけてくる。
繁盛しているのかよく判らないお店だ。若干ボロが入っているし、どう考えてもあまり綺麗とは思えない。

「私は『ちーずばーがー』と言うのを一つ。コウイチはどうする？」
「俺はソーセージマフィンで」
「あいよ。ちょっと待ってな」
出てくるチーズバーガーとソーセージマフィン。
パンの形がちょっと特殊で、チーズバーガーは普通のブレッドを横に半分に切った物にチーズや野菜を詰め込んだものだ。
ソーセージマフィンはソーセージを一度ひき肉状態にし、もう一度練り直して作った物に店特性ソースをかけてはさんだものだ。
シエナは貰ったチーズバーガーを一気にかぶりつく。お姫様とは思えないほどのかぶりつきだが、口が女の子のためか少し小さいため、うまくかぶりつけないらしい。
そのシエナのちょっと困った顔は光一の胸にズガンと来る。
「ん？　どうした？　あーこっちの奴が気になるのか？」
口元を凝視していたためか、チーズバーガーが気になると思われたらしい。
「そうだな……食べ比べか……私もそのソーセージマフィンとやらを一度食べてみたい。だから食べ比べをしよう」
「食べ比べですか」
「そうだ。一口だけだが、食べて良いぞ」
とシエナはその持っていたチーズバーガーを光一に向ける。
まるで恋人同士が「あーん」とやっているような感じだが、シエナにはその気は全く無い。むしろ向けられて困ったのは光一のほうだった。
その差し向けられたチーズバーガーはどう考えても『手渡す』と言うより、『かぶり付け』と言っている様にしか感じられない。
「じゃ、じゃあ、失礼して……」
パクリとチーズバーガーを食べる。味は地球のチーズバーガーと似ているようで少し違う。
まずパンがかなり柔らかい。ハンバーガーに使われるパンは基本的に結構固めだが、この世界のハンバーガーのパンはものすごくや

わらかかった。
「では、私も」
光一が前に差し出す前にシエナは光一の持っているソーセージマフィンにかぶりつく。
無論かなり接近する事となり、シエナの髪から香る男とは違う女の子独特の香り。クラッと来そうなシエナの香りが光一の鼻をつく。
「ん、ソーセージマフィンと言うのもおいしいな。次からはこれを買ってみよう」
「あ……は、はい」
まるで漫画や小説のような世界だな……。
ラブコメのようなリアクションを取ってしまった光一は小さくため息を吐きながらそう感じた。

ACT．017　呪われた槍と一人の少女？（後書き）

すみません。ちょっと所用で静岡へと行っていました。
ついでに等身大ガンダムを見て着ましたが、あれですね。思ったよりも小さいんですね……ガンダム……。
そしてケバブを頬張る私。ケバブ……美味しい……。

小説は思ったよりも話が進まないという……。
あれぇおっかしいなぁ。今回のお話でブレフィアまで行くはずなのに、全然行く気配が無いと言う……次回は必ずブレフィアへ向かいます。絶対に。きっと。
……多分。

ACT．018　呪われた槍と一人の少女？

もう涙すら枯れ果てた。
少女は俯きながらじっと自分のことを考える。
村では普通の女の子だった。もともと小さい村で、村全ての人が知人。そんな村だったので、彼女の事を知る人も多かった。
たい焼きをくれたおじさん。お母さんと買い物に行った八百屋のおじさん。友達のお母さん。
多くの人が彼女の事を好いており、また、彼女もそんな彼らの事が好きであった。
もともと口数の多い女の子ではなかったが、それでも気持ちは伝わっていたのだろう。何も言わなくても向こうから喋りかけて来てくれた。
親のいない少女には孤独がつらい事を知っている。だから村の人々という存在は少女にとってはとても嬉しいもだった。
それを自分で壊したのだ。
ギュッと手に持った”槍”を握る。
『コロセ……コロシツクセ……』
いまだに聞こえる槍の怨嗟の声。少女を狂わせる――悪魔の声。
「ふ……ふふ……」
少女は嗤った。心底おかしそうに顔を歪めながら嗤った。
それはもう既に正常な人間の笑いではないのだが、少女のその笑いは壊れていながらもとても悲しい笑いだった……。
日は高い。もしかしたら別のニンゲンがこの村へやってくるかもしれない。
先ほど殺した男の死体を口を歪めながら眺め、そう考える少女。
そんな少女の頬を涙がつたった。

☆☆☆☆☆

ブレフィアと呼ばれる村はレーゼルから東の方へと走った場所にある。
周囲を森に囲まれた村で、基本的には農業地として有名。しかし、森の中心部にあるためか連絡が回るのが遅く、周辺の村から見ると孤立状態に近い。
さらにブレフィアの特徴として有名なのが、とある”槍”を崇めている事だ。これは宗教的なものの一種として有名で、この存在もブレフィアが他の村から孤立するにいたった物の一つであった。
そのため、ブレフィアにおける情報と言うものはかなり少ない。そう、たとえ森に着いたとしても彼らには細かい村の場所は分らない。
「で、この森のどこかにブレフィアがあるんですね」
「そうだ。実際こっちの方へはあまり足を運ばないから、場所が分らない。だから探すしかない」
光一達はアレから少ししてレーゼルを出て、そのまま真っ直ぐブレフィアへと向かった。もともとレーゼルは視察のためだけだったので、特に寄り道することなく、そのまま真っ直ぐブレフィアに向かってきたのだ。
そこまでの道のりは草原を走るものだったため、特に問題は無かったのだが、今現在彼らには一つの問題があった。
彼らの目の前にあるのは深い森。ブレフィアを覆う森で通称を『迷いの森』と呼ばれているらしいとても深い森なのだが、ブレフィアへ行くにはこの森の中をどうしても探索しなければならない。
しかし、この２０人で同時に探しに行っても発見は遅くなってしまうだろう。必然的に何人かの班に分かれて探索する事となる。
「ここでは一人での行動を制限する。２～３以上の人数で班を組み、捜査に当たれ！　私はコウイチと行く。あとブーラ、お前も着いて来い」
「ハッ！！　了解であります！！」

ブーラと呼ばれた兵士は馬上で敬礼しながら恭しく答える。
それを見てシエナは頷くと、叫んだ。
「森は深い。もしかしたら迷うかもしれないが、迷った場合はすぐさま森を出ようとするんだ」
「「ハッ！！」」
「では捜索開始」
「「了解しました！！」」
さすが軍隊と光一が感心するほどに皆の動きは統一化されている。
テキパキと2～3人の隊列を組み、それぞれの隊が別々の方向に進んでいく。無駄口も叩かず、騒がず、彼らは自らの道をしっかりと歩いて進んで行った。
地球育ちの光一としてはかなり唖然とする光景だったが、この世界生まれであるシエナとブーラは驚くことも無いのだろう。シエナは一つ頷くと、コウイチとブーラを見た。
「それでは私達も行こう」
「あ、は、はい！！」
「了解です」
シエナとブーラは迷いもせずに森に入っていく。
「あ、ま、待ってくださいよ！！」
それに遅れないようにと光一が森に一歩入った瞬間――――チリン……と鈴の音が響いた。
「えっ？」っと周りを見回すが、鈴のような物体はもちろん見つけることなど出来なかった。しかし、その鈴の音は確かに光一の耳に聞こえてきたのだ。聞き違いなんて感じないほどにはっきりと、まるで耳元で鳴らされたかのように……。
「どうした？　コウイチ？」
少し先でこちらを振り返りながら聞いてくるシエナに「何でもありません」と答えて走り寄る光一。
その走っている間、ずっと光一は同じことを感じていた。
（あの鈴の音は一体なんだったんだ……？　少し……嫌な予感がす

る……）

その頃、兵士達の別動隊の一つにブレフィアへと真っ直ぐ進む班があった。

「アレックスさん。本当にこちらの道であっているんでしょうか……？」

「大丈夫だ。……たぶんな」

「全然大丈夫じゃなさそうな返事なんスけど……」

三人は特に理由も無く真っ直ぐと進んでいたのだが、その方角は間違いなくブレフィアに向かっていた。運があるのか無いのか……。

唐突に三人の視界は一気に無くなる。

「むっ？　霧か……？」

「普通のきりにしてはずいぶん濃い霧ッスね」

「つまり普通じゃないってことか？　お前ら、用心しろよ」

「ウィーッス」「はい」

霧はかなりの濃さで、数メートル先が見えないほどだ。そんな霧が急に発生するなんて普通のはずが無い。

三人の中でもっとも年長であるアレックスはそう判断すると、腰の剣を抜き、警戒しながら進む。二人もアレックスを見てから剣を抜き、アレックスの後ろを守るように三人で△の形にになりながら進んだ。

「あれ？」

「どうした？」

アレックスの左後方で警戒をしていたウィーグルが声を上げた。

「そこ見て欲しいッス。なんか人が倒れているみたいなんッスよ」

ウィーグルの指差した方向は彼らのいる場所から数メートル離れた、ギリギリ見えるか見えないかの場所であった。そこには男か女か、老人か青年かも分らないのだが、木に寄りかかるようにして一人の人間が倒れているように見える。

アレックスはそれを見ると一つ頷き、
「とりあえず行ってみよう。要救護者ならすぐに助けなければならない」
そう二人に指示を出した。
駆け出し、倒れている人物を見る。
「うへぇ！？」
「これはまた……かなりの美少女だな……」
倒れていたのは女の子だった。それもかなりの美少女で、長い銀髪、黒い服、白い肌、閉じられた瞳。まるで人形のように精巧で、それでいて人間ではないような怪しさを持つ少女だった。あまりの可愛らしさにウィーグルは声も出ないようである。
そんなウィーグルを見て「やれやれ」と呆れながらアレックスは少女に近づいた。
「大丈夫か？　君？」
「……うぅぅ……」
少女に意識は無いようだ。アレックスはじっと少女を見た。
長い銀髪は腰くらいまで届いているだろう、その銀髪にこれまた黒いレースのついたカチューシャをつけていた。顔は１０歳程度に見えるほどに若く、まだまだ子供っぽい所が抜け切れていない。服は黒を基調としたワンピースタイプの服で、地球的言い方をすればゴスロリに近い。こちらでは一応ドレスと言う扱いなものの、それでもこのような服を着ている人間は珍しい。
アレックスがじっと見ているのが不服だったのか、少女にウィーグルが近づいた。
「お、おい！！」
「大丈夫ッスよ。普通の女の子じゃないッスか～～」
「だが、今現在この森のブレフィアで事件が起きているのだぞ？不用意に何かに近づくと……」
「大丈夫、大丈夫ッスよ……」
近づいていくウィーグル。だが、

「うぇ？」
ウィーグルが気が付いたときにはそこに少女の姿は無かった。
首をかしげながらアレックスの方を向くが、アレックスは瞳を大きく見開かせながら「ウィーグル！！避けろ！！」と叫んでいた。
何がなんだか分らない。
でも、一つだけ分ったことがあった。
ウィーグルは痛みで倒れてゆく体と、薄れ行く意識の中で少女を見つけた。
大人でも扱えるか分らない大きな槍を持った先ほどの少女が、赤い瞳でウィーグルを見下ろしている。あぁ、彼女が……そう判断すると同時にウィーグルの意識は無くなった。
「ウィーグルゥゥ！！！」
アレックスは叫ぶもウィーグルから返事が帰ってくることは無い。
すでにもう一人の仲間であるディックは少女を睨み、相手の動きをじっと見ながら警戒をしているようだ。だが、アレックスには少女よりもウィーグルのことが気にかかっていた。
あの少女の放った後ろからの一撃。慈悲も無い殺しの一撃はウィーグルの体を貫き、確実に死に至らしめただろう。
ウィーグルの体からあふれ出た血が森の草々を赤く染めてゆく。
「くっそ……ウィーグル……！！」
戦争に身を置く者、常に死を覚悟しながら戦っているが、こんなところで死ぬなんておかしな話だ。それも相手は仕える主、シエナよりも幼く見える少女だ。これが変な話だと思わなかったらどういった話だというのだろうか。
ウィーグルへの悲しみを押し込め、アレックスは剣を握って少女を睨んだ。
そんなアレックスとディックを見てクスクスと笑う。その笑みは人間のものとは到底思えない物だった。
「何がおかしい！？」
「コロしてあげる……アなたも……アナたも……このモリにはいっ

タ人スベテを……！！」
「あいつ……すでに壊れかけてやがる……！！」
ディックがそう悪態づいたのをアレックスは聞き、同意した。しゃべり方は人間とは到底思えないほどの雑音が混じっていて聞き取りづらい。槍を軽々と持ち歩くその姿はメリニアという将軍を見ていない場合は脅威に感じるだろう。
「いけるか？　ディック」
「えぇ、大丈夫です。問題なく戦えます」
「クスクス……」
「「……ッ！！」」
同時に駆け出すディックとアレックス。左右から来る斬撃に対して何もリアクションを起こさない少女。
「やぁ！！」
訓練と同じように右からアレックスの刃が走る。それを後ろに交わした少女に向かってディックの刃が奔った。
ガチィン。重い音を立てながらディックの刃は少女の持つ槍へと激突するも少女を吹飛ばすことすら敵わない。
走って勢いの乗った攻撃に対してバックステップした少女を吹飛ばすこともできない……ディックは舌打ちをしながら返す刃で二回目の斬撃を叩き込む。
だが、その一撃は空を切った。
ウィーグルが少女を見失ったときのように霧の中に少女がフゥと消えてしまうのだ。
「くっそッ！！」
「後ろだ！　ディック！！」
アレックスのその言葉を聴いてから振り返ったのでは遅い。そう判断したディックはアレックスの言葉を信じ、後ろに気をつけながら右へ飛んだ。
そして先ほどまで立っていた場所を見れば、少女がその場所でクスクスと笑っていたのが見え、ディックはしっかりと避けられたこ

とを感じた。
「助かったアレックス」
「お安い御用だ」
立ち上がり、剣を構える二人を少女はジッと見つめ、やがてポツリとつぶやいた。
「やはり……この女の槍の技術だけでは敵わぬか……」
それは今までのような少女の声音ではなく、まるで年を取ったお爺さんのような声。二人は呆気に取られながら少女の動きを見ていた。
それが命取りだったのだろう。
少女が掌を二人に向けたとき、二人は逃げる事も、反応する事も出来なかったのだ。
「凍てつく氷（フリージングアイス）！！」
「「なっ！？」」
突然湧いた氷で足を氷漬けにされてしまい、身動きの取れなくなった二人。
少女のつぶやいた一言に二人は驚きながらも同じ結論へと到達した。
「ま、魔術だと……！？」
「このファーメルに住んでいる人間が魔術なんて……くっそ！！甘く見ていた……！！」
「私は氷に対して強い魔術を放つことが出来る……この霧を見た時に何も感じなかったのかな」
確かにこの霧は普通の物だとはアレックス達は思っていなかったが、まさか魔術で作り出したものだとはさすがに思ってもいなかった。
考えてみれば霧とは微細の水分（水蒸気）が凍り、大気中に止まっている状態で起こる。だから冬の朝方などの寒いときに発生する事が多い。氷の魔術に強いものならば簡単に使用することが出来るだろう。

だが、二人は相手が魔術を使うなんて予想を全くもってしていなかった。それはそうだろう。魔術を使う人間がファーメルには極端に少ない。理由は魔術が才能によってしか使用出来ないことと魔術が子に伝わるものだからである。
もともと魔術とはマフェリアが一番栄えているのだが、ファーメルはマフェリアからもっとも遠い国である。魔術的な能力を持った人間が来ることは少なく、結果的にファーメルに魔術を扱える者が少なくなってしまうのだった。
二人が魔術を警戒していなかったとしても不思議ではない。
「その格好では避けることも叶うまい……我に貫かれるが良い！！」
ジッと槍を構えた少女をグッと睨むアレックスとディック。
「やめて……！！」
叫び声が上った。それは少女自身が発した声である。
少女自身が発した声は今までのようなお爺さんの様な声ではなく、年相応の高い女の子の声であった。
「く……未だに意識が残っていたか……いや、もしかすると近づいてくる者の何かに作用されたか……」
「もう、やめて……リアはこんな事……望んでない」
まるで一人二役のようなしゃべり方。だが、確実に少女は何かに抗っていると二人は分った。
だが、足元が凍っている二人にはどうする事も出来ない。唇をかみ締めたその時、彼らの目の前にその人は現れた！
「大丈夫か？」
「「い、戦姫様！！」」
「むむ……ファーメルの第一姫か……よく似ている……」
「貴方は……そう……『ブレフィアの槍』か……」
「我を知っているのか。ならば話は早い。我と一戦交えてもらおうか！！」
「ブーラ！！　二人の足についた氷を上手く割って。コウイチは出来るだけ近づかないようにして」

「分った」
「了解しました」
赤髪の少女シエナとブレフィアの槍と呼ばれる特殊な槍を持った銀髪の少女。二人のその姿に光一はゴクリと唾を飲み込んだ。

ACT．019　呪われた槍と一人の少女？

シエナはゆっくりと荒天翔羅（こうてんしょうら）を抜き放ち、少女を見据える。
少女はシエナをジッと見つめながら片手でとても重そうな槍を持っている。その姿に光一は少しだけ違和感を感じるも、その正体は分らなかった。
二人は動かない。独特な呼吸法を取っているのか、シエナからも少女からも呼吸の音は聞こえず、体が上下してぶれることもない。それはそれぞれが相手を強敵であると判断するには十分な要素だったようで、同時にシエナと少女の表情が険しくなった。
一瞬。まず先に動き出したのはシエナのほうであったが、その差は一瞬といっても良いほどの差であった。同時と感じるほどにタイミングで少女も動き出したのだ。
「戦姫様……気をつけてください、奴は魔術を使います……」
「ま、魔術ッ！？」
兵士（アレックス）の一言に驚いたのは光一である。この世界にそんな摩訶不思議（ない）力があるなんて想像もしていなかっただろう。
驚いたまま光一は2人を見た。
走って接近しあう2人は中央でぶつかると、そのまま武器で技を放ちあう。
「やぁ！！」
シエナの一撃必殺である細剣（レイピア）の攻撃は少女の槍によって阻まれ、少女まで届く事ができない。圧力の関係上、シエナの武器の威力は大きいものの、簡単に言ってしまえば”当たらなければ意味は無い”という事だろう。先ほどから少女にはその攻撃が掠ってすらいなかった。
逆に少女の一撃はシエナとは違って重たい一撃であった。槍で遠心力を使い、”突く”のではなく”叩き斬る”事によってシエナよりも優位に立っている。シエナにはその少女の攻撃は受け止めきる

事ができず、避けるしかないからである。
「くっ！？」
さらに少女の槍はまるで意思を持ったかのように攻撃が跳ね上がる。横に凪いだと思ったらその途中で上に切り上げて、さらにはそこからすらも追撃してくる。あまりにも型破りであり、変幻自在なその攻撃はシエナの体力を徐々に奪ってゆく。
シエナにあせりの表情が見えたとき、少女がポツリとつぶやいた。
『氷の枷（アイスバインド）』
「しま――」
少女の周囲に雪のような塊が現れ、それがシエナに襲い掛かる。度重なる槍の攻撃を回避する事に夢中であったシエナは体制を崩し、その雪を右手首の辺りに受けてしまう。
雪はその瞬間体積を増し、近くの木まで接触するほどに大きくなり、やがて”雪”は”氷”となる。完全に右手を木に止められてしまったシエナはすぐに右手で持っていた荒天翔羅（こうてんしょうら）を落とし、空中で左手でキャッチする。
少女の追撃は今までよりも勢いののった槍での一撃。
グワァと接近する刃をジッと見つめながらシエナはタイミングを合わせる。
「火龍一閃（かりゅういっせん）……」
「ぬぅ！？」
「焔（ほむら）っ！！」
剣から表れた”炎”が彼女に襲い掛かってきていた少女を包み、燃やし尽くそうとする。
だが、一瞬の判断ですぐに方向転換した少女に炎は当たってはいない。シエナの攻撃はただ何もない空間を炎で斬っただけであった。
「ふぅ……そういえばファーメルの姫様は”炎系統の魔術”を習得していたのだったな……いやはや、忘れていた。と言うことは氷の枷（インド）も無駄か」
『炎の手（フレイムハンド）』

シエナの右手から炎が上り、シエナをくっつけていた氷は解けて消えてしまう。
「し、シエナさん……？　その炎は……」
「私達ファーメルはもともとは炎を司る一族だった。だから私だって炎系統の簡単な魔術なら使用できる」
「炎か……ちょっと相性が悪いな……」
魔法には９つの属性が存在する。炎、氷、雷、水、土、風、光、闇、空の９つである。それぞれには相性があり、炎は氷に強く、今回の例で言えば魔術的な意味では少女よりもシエナのほうが有利であるといえる。
しかし、これはあくまでも魔術の属性的相性であり、実際の戦闘では魔術的知識、魔術能力、さらには経験が必要となる。正直シエナはその三つ全てあまり高い能力値ではないため、荒い息を整えながら冷や汗をかき始めていた。
（こいつ……思った以上に厄介だ……）
シエナのもっとも不得意とする相手が魔術師であった。接近戦では負ける気がしないのだが、ひとたび距離が開けば遠距離から魔術を放たれてしまう。そんな相手がシエナのもっとも苦手とする相手だ。
ギリッと歯を食いしばり、左手の剣を右手に持ち替えた。先ほどのアイスバインドのせいで若干感覚がおかしいが、凍傷にもなっていないようなので問題はないだろう。ぎゅっと握ってシエナは考える。
（どうする？　どうすればアレに勝てる？　いや、勝つといっても少女を殺してはいけない……）
シエナはあのブレフィアの槍がどういったものなのかを把握していた。
だからこそ――戦いづらい――
「ふふ……ファーメルの姫君よ……おぬし……知っているな……？」
口を歪めて笑う少女にシエナも光一も顔をしかめた。

それはあまりにも少女っぽくない口調、声。だが、それ以上にその少女の表情に二人は驚いていた。
まるで顔半分だけが少女の意志のように悲しみを浮かべていたのだ。もう半分は逆に愉快そうに笑っていた。それが”槍”の意志なのだと瞬時にシエナは判断した。
「ならば分るだろう？　このまま”本体”を殺してしまえば”本体”は簡単に死に至ってしまうぞ……？」
「そうだな……」
シエナには少女を殺さずに”槍”をどうにかする方法を知らない。ただ、ブレフィアの槍が使用者の体を乗っ取ってしまうと言う事を聞いた事があっただけで、対処法などを彼女は知る事ができなかった。
少女が顔を歪めながら槍を構え、シエナに走り寄ろうとした瞬間――

―チリン―

鈴の音が森に響いた。
「「「――――ッ！？」」」
息を飲むのは三人。シエナと少女と、光一だけであった。２人の兵士は急に動きの止まった三人を不思議そうに眺めていた。
チリンと二回目の鈴の音が響く。光一は恐る恐る鈴の音の発生源である自らのポケットを探る。っと……
「こ、これは……」
「むむぅ！？　”聖鈴（せいりん）”！？　何故貴様がそれを……！？」
「……そうか……シエナさん！！　そいつは槍の先についているオレンジの宝玉を破壊すれば槍だけ止める事ができる！！」
「コウイチ、分った」
「くぅ、聖鈴が……くっそっ！！」
少女の持つ槍の刃の部分には光一の言ったとおりオレンジ色の宝

玉がついていた。それは黒いラインの入った宝玉で、シエナにとってはまるで”瞳”のようにも見えた。
一気に近づいて宝玉を割る。それが一番だと判断するが問題が一つだけあった。
「だが、弱点が分ったとしても壊せなければ意味はあるまい」
そういうことだ。一気に懐に入るのは良いが、宝玉が割れなかったときのリスクが高い。どうするべきだろうか……。
チリン。三度鈴が鳴った。
「大丈夫です、シエナさん。俺がサポートします」
「……分った」
その光一の一言に何故か頷くシエナ。頷いた後で戦闘初心者である光一に任せて良いのか？と疑問に思ったが、ここは彼を信じるしかない。
光一は鈴を握り締め、ゆっくりと目をつぶった。
『凍てつく氷（フリージングアイス）』
水蒸気を凝固させ、氷として固める氷魔法。その特徴故に何処に氷を発生させるのがわかりにくい魔術である。
アレックスとディックの事を思い出し、「足場を凍らされるかもしれない」と足場に注意を図ろうとしたシエナに光一の声が届いた。
「違います、上です！！」
「何っ！？」
その驚きの声はシエナではなく、少女から上った。
シエナが上を見上げると、人2人分ぐらいの体積を持った氷が空に浮かび、シエナに落ちてこようとしている。
『氷結の弾丸（アイスバレッド）』
急に速度を上げて落下する氷をシエナは紙一重で避ける。分っていてなお”紙一重”だった物が気づかずに落とされていたらどうなっていた事か。シエナはそう考えて内心ゾッとしていた。それと同時に教えてくれた光一に感謝し、少女を見据えた。
「まさか……聖鈴にそこまでの力があるとはな……失念していた」

「ッ！？」
その少女のつぶやき声と同時に光一は息をのむ。鈴の教えてくれた少女の次の行動は、光一に攻撃すると言うものだったからである。
（シエナさんに助けを求めるか？　いや、彼女に頼りっぱなしで俺は……）
「破っ！！」
少女が加速し、ブレフィアの槍を光一に振るった。
その速度は今までの戦闘よりも速いもので、不意を突かれてしまったシエナに対応できる速さではない。
光一は呆然としながら自らに接近する少女を見つめていた。
「コウイチィィッ！！！！！」
いつもは冷静なシエナの怒鳴り声が響き、ブレフィアの槍が光一の体に吸い込まれた。

ACT．019　呪われた槍と一人の少女？（後書き）

次回のために今回はちょっと短め……べ、べつに手抜きじゃないんだからな！！
次回はいよいよ槍との戦いが終わるはず！！
光一がちょっとだけがんばります。シエナもがんばります。
アレックスとディックはもう出番はないでしょうね（笑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9274m/

ヴェルガの牙

2010年10月8日13時50分発行